

『ときのみもり』

作・谷野静一

「ときのめもり」

登場人物

剛力 進 (57)	脱サラ行政書士 未婚
乗本 太郎 (54)	車販売会社支店長 未婚
西田 研 (57)	食品会社研究員
西田 明美 (54)	西田の妻 元食品会社研究員
美波 透 (81)	ミュージシャン 元保険会社勤務
美波 美咲 (23)	美波の孫 フリーター 既婚 妻他界
進藤 弓 (39)	医師

舞台設定

相部屋病室

ベット4台 サイドにカラーボックス4台 椅子4脚

固定電話1台

出演者全員が時計型センサーをつけている

全員同じ服装 (白シャツ黒ズボン)

舞台奥に廊下 (人通りあり) ・中央に出入り口

奥の廊下にカウンセリング室の矢印の看板が見える

ベットの配置 (一つずつカーテンのしきりがある)

上手から

剛力

乗本

西田

美波

美咲が美波のベット脇でスマホを見ている

・・・

(ハイハット音・チャ、チャ、心拍程度の速さ)

剛力が廊下の上手から部屋をチラ見して下手に通
り過ぎる

進藤が病室に入ってきて西田のベッドの近くに

「こんにちは」

「・・・こんにちは」

「西田さん、みなかった？」

「・・・いえ」

「あっそう、どこいったんだろ」

・・・

「美咲ちゃん、いつごろ来た？」

「・・・え」

「いつごろから来てるの？」

「ああ、10分ぐらいまえですかね」

「あ、そう・・・あ、美波さん、売店の近くで会ったよ」

「そうですか」(スマホおいじってる)

「散歩かも、中庭の方に行ったよ」

「はい」

「行ってみれば」

「・・・いえ、ここで、待ってます」

「あ、そう」

進藤出て行く

しばらくして乗本が入ってくる

乗本 「あ」

美咲 「こんにちは」

乗本 「こんにちは」

美咲 「……」

乗本 「美波さん、……練習、かな」

美咲 「……多分、散歩ですかね？ 楽器ありますし」

乗本 「あ、そ」(ベツトで車雑誌を読みだす)

……

乗本 「美咲ちゃんは、おじいちゃんこ？」

美咲 「え？」

乗本 「あ、いや、よく来るよね」

美咲 「あ、すみません」

乗本 「え、いや、そういう意味じゃなくて」

美咲 「……迷惑、ですか」

乗本 「あ、いや、全然。ほんと。ごめん、変なこと聞いちゃったかな」

美咲 「変なこと？」

乗本 「変っていうか、そうだね、変じゃないよね」

美咲 「……」

……

乗本 「美波さんって、ジャズやってるんだよね」

美咲 「あ、、はい」

乗本 「かっこいいよね」

美咲 「そうですか」

乗本 「え、いや、かっこいいと思うけど」

美咲 「うーん、わかりません」

乗本 「わからない？、え、でも演奏とか聞いたことあるんですよ」

美咲 「ありますけど、ジャズとかよくわからないです」

乗本 「え、あ、そう」

西田入室

美咲 「乗本さんはジャズってわかりますか？」

乗本 「いや・・・ごめん、あんまり」

美咲 「じゃ、一緒ですね」

乗本 「一緒」

美咲 「はい、わからないってことです」

・・・

乗本 「あの・・・西田さんは、聴きますか？」

西田 「え？」

乗本 「あ、あの、ジャズですよ。」

西田 「何です、いきなり」

乗本 「いや、西田さんは聴いてそうだなあとと思って」

西田 「・・・聴いてましたけど」

乗本 「え、聴いてました？」

西田 「あ、いえ、最近ほとんど聴いてないですね」

乗本 「あゝ、ジャズってどういうものですか？」

西田 「え」

乗本 「ジャズ、わかる、わからないってよく言ううじゃないですか」

西田 「ああ」

乗本 「難しい、みたいなイメージありますよね」

西田 「・・・ああ、でも、そこらじゅうでかかっていますけどね」

乗本 「え？」

西田 「飲み屋でも、喫茶店でも。かけてないところが少ないぐらいですよ」

乗本 「あ、いや・・・まあ、そうですけど」

(ハイハット音：チツ)

西田 「・・・すみません、少しやすみます」

剛力入ってくる(西田を見る)

西田、ベットで黙祷し、脱力している

乗本 「あ、・・・はい・・・」

西田 「すみません。私のことは気にしないでください」

・・・

美咲 「・・・あの、西田さん」

西田 「・・・」

美咲 「進藤先生が、探してたみたいですよ」

西田 「・・・ああ、忘れてた」(拳開閉2回、からパンチ2回、伸び、開眼) 「ありがとう」

剛力・乗本・美咲、西田の動きを見つめている

西田、カウンセリング室に行く

剛力、出て行く西田に会釈する

・・・

乗本 「なんですかね、(空パンチする) これって」

剛力 「たぶん、マインドフルネスみたいのかな」

乗本 「マインドフルネス？」

剛力 「うん、瞑想とかの一種、院長に指導されたんじゃないかな」

乗本 「メンタル系ですか？」

剛力 「うん、自己催眠法の一つだね」

乗本 「詳しいですね」

剛力 「以前、過労で会社に賠償請求する件を取り扱ったことがあるんだけど、そのクライアントもやってたわ」

乗本 「へー、剛力さんはいろんなこと知ってますよね」

剛力 「つていうより、まあ、いろんな人がいるってことですよ。あ、美咲ちゃん、今日も来てるんだ・・偉いなあ、美咲ちゃんは」

（ハイハット音…チツ）

美咲 「おじいちゃん探してきます」

乗本 「え？、待ってたらくるんじゃない？」

美咲 「あ、はい、でも、喉もかわいたんで、ジュースでも買ってきます」

乗本 「あ、そ」

美咲 出て行く

乗本 「マインドフルネスって効くんですか？」

剛力 「効くって思えば効くんじゃないの」

乗本 「なんですか、そんな中途半端な。」

剛力 「そう、だから、いろいろ問題も起こるんだよね」

乗本 「問題？」

剛力 「感情とかが入り込みやすいからね。メンタル系は。それに、個人差が大きい。」

乗本 「個人差？」

剛力 「うん。基本、本人の意識のもちようみたいなどころあるからね」

乗本 「意識のもちよう？」

剛力 「人の意識って、影響受けやすかったり、受けにくかったりするでしょ」

乗本 「ああ」

剛力 「薬とおもって小麦粉飲まされても、効いてしまう人もいるみたいな」

乗本 「あ、聞いたことありますね、それ。・・え、そういうものなんですか。マインドフルネスって」

剛力 「たぶん」

乗本 「たぶん？」

剛力 「・・まあ、信じるものは救われる」

乗本 「でも、治療方法なんですよ」

剛力 「うん、でも、意識の治療って、俺にはピンとこないけどね」

乗本 「え」

剛力 「なんか、意識がよくなるとか悪いとか」

乗本 「でも、最近をよく問題になってますよね」

剛力 「そういうものって、誰かに直してもらうものかな」

乗本 「いや、どうしようもない人もいるんじゃないですか」

剛力 「うん、そういう人もいるのはわかるけど、自分から病院に来る人って、なんかさ、」

乗本 「なんですか」

剛力 「いや、ごめん、いいよ」

進藤が入ってくる

進藤 「ああ、いたいた。乗本さん、またセンサー、緩んできますよ。だめですよ、しっかり着けてもらわないと」

乗本 「ええ」

進藤 「ちよつと見せてください。・・ほら、この3つ目の穴に入れてくださいって言ってるじゃないですか。」

乗本 「ちよつと、この・・きついんですよ、この三つ目は」

進藤 「ちゃんとつけないと意味ないでしょ。」

乗本 「でも・・こんな一日中着けなくても」

進藤 「乗本さんの場合は血糖値ですから、食事毎の血糖値変動が大切なんです。」

乗本 「ちゃんと食事制限受けているじゃないですか」

進藤 「あの、間食、気をつけましようね」

乗本 「え？」

進藤 「昨日は2回したでしょ。14時ごろと23時ごろ」

乗本 「え、なんで」

進藤 「だから」

進藤 「見てたんですか？」

進藤 「見てませんよ。でも、わかりますよ、そのセンサーで」

乗本 「センサーで？」

進藤 「血糖値をずっと測ってるんですから」

乗本 「あの、間食は・・・その、禁止ですか？」

進藤 「しりませんよ、そんなことは。院長カウンセリングで聞いてください。」

乗本 「院長に、ですか・・・」

進藤 「はい」

乗本 「あのう・・・間食ばれてるってことですよね」

進藤 「ばれてますよ。もちろん」

乗本 「・・・」

進藤 「そこは、そんな気にしなくていいですよ。何も言われないうことは、間食してもいいということですよ。」

乗本 「え、どういうことですか」

進藤 「だから、血糖値の変動を見るんです。間食することも承知の上です」

乗本 「あ、そういうことか」

進藤 「そう、だから、センサーはしっかりつけて間食してください。ただし、食べ過ぎはダメですよ」

乗本 「あ、はい。なんか監視されてるみたい」

進藤 「いいえ、データを収集してるんです」

乗本 「……」

進藤 「あ、剛力さん、あなたのセンサーも緩みがちですよ。特に寝てるとき」

剛力 「そんな、寝てるときっていわれても……どうしようも……」

進藤 「簡単です、寝る前に穴一つ深くお願いします。剛力さんの場合は睡眠プロセスが大切なんですから、わかってますよね。」

剛力 「わかりました」

進藤 「それと、剛力さん、スマホかタブレットを使ってませんか」

剛力 「え？……いえ」

進藤 「そうですか、深夜、使ってますよね、何か」

剛力 「いいえ」

進藤 「本当ですか」

剛力 「……ええ」

進藤 「電磁波センサーを持ってきてもいいんですよ。」

剛力 「え、そ、そんなものあるんですか？」

進藤 「ありますよ。電磁波はセンサーにノイズを与えるんです」

剛力 「……ああ、いや、わかりましたよ」（カバンからスマホを出して渡す）

進藤 「それだけ、ですか？」

剛力 「ええ……」

進藤 「たぶん、こんな小さいものじゃないと思うんですけどね」

剛力 「え、なにが？です？」

進藤 「剛力さんは契約には厳しい人ですよね？」

剛力 「なんですか、いきなり」

進藤 「もってきてもいいんですけど契約書」

剛力 「……すみません。でも、これがないと……」

剛力、ノートPC・ルーターも渡す

進藤 「あと、深夜、映画をみるのは感心しませんね」

剛力 「え！、あの、なんで、その、そんなことわかるんですか」

進藤 「心拍の動きでだいたいわかりますよ」

剛力 「ええっ、本当？、ええ、そ、そうなんですか……」

進藤 「まあ、私が見てるのは心拍波形ですけどどんな映画化は想像つきますよ。」

剛力 「え！？」

進藤 「タイトルまではわかりませんがね……」

剛力 「え？・いや、……え？……」

進藤 「ま、お気持ちはわかりますけどね」

乗本 「剛力さん」

剛力 「なんだよ」

乗本 「あ、いえ、別に……他意はないですよ」

剛力 「なに、他意って……なに？」

乗本 「あ、ごめんなさい……でも、いいじゃないですかね、羨ましいぐらい」

剛力 「な、何言ってるの……」

乗本 「いえ、別に」

剛力 「羨ましいって、なに？、え？」

進藤 「ま、羨ましいというのはどうですかね。問題は朝ですかね。ね、剛力さん」

剛力 「先生……」

乗本 「あ、朝ね！……なんか、安心した」

剛力 「安心して何？」

乗本 「あ、いいえ、別に」

進藤 「意地悪しているわけじゃないんですよ。センサーへのノイズは解析に邪魔なんです、本当に。・・・いや、そうじゃなくて、みなさんの健康のため、外界からの情報をできるだけ少なくするためもあるんですから。」

乗本 「外界って・・・ここはどこなんですか」

進藤 「いや、今は、こういうものを持っているところでも、仕事とか、いろんなこととか、できてしまうでしょ。ついついこれまでの生活をひきづってしまうんです。それでは、治るものも治らないでしょ。」

剛力 「これまでの生活がノイズみたいに聞こえますけど」

進藤 「ここでは、みなさんご自身のことを知ることが最重要ですからね。だから、できるだけ外界からの連絡も避けるために固定電話まで設置しているんです。」

乗本 「それねえ、なんだか、昭和の時代に戻った気分ですよ」

進藤 「みなさんはその時代を十分楽しんできたわけですから。簡単でしょ」

剛力 「なんですか、その理屈。先生だって昭和生まれでしょ。」

進藤 「それはそうですね。私の場合、気が付いたら平成でしたから。」

剛力 「ええ、そんな・・・もんですか」

進藤 「そんなもんですよ。今や平成も終わっちゃいましたけど」

剛力 「ああ・・・」

進藤 「四半世紀もあつという間って感じですね」

剛力 「四半世紀って」

進藤 「時間の目盛りって大事ですよ。そこで人は生きてるんですから」

乗本 「時間の目盛り？」

進藤

「秒の世界が分の世界をつくり分の世界が時間の世界をつくり、時間の世界が毎日の世界をつくり、毎日が月をつくり・・・自分がどこの時間の中で生きているかって大事と思うんです」

剛力

「ほー、なるほど。先生、毎日、そんなこと考えているんですか？」

進藤

「いや、でも・・・そう思う時があります」

剛力

「時間かぁ・・・短かったり、長く感じたりすることもそれに関係してるんですかね」

進藤

「そうですね。時間の目盛りはつねにゆらいでいて、秒の世界のゆらぎは分や時間、年、いや人生まで影響を及ぼすと思います。私はずけど。」

乗本

「ゆらぎ？・・・ああ、はやく外界に戻りたいなあ」

進藤

「あの！外界に戻るためにここにいるんじゃないですよ」

乗本

「え？」

進藤

「だから、本来の心身の力を取り戻すためです。」

乗本

「本来の心身の力？」

進藤

「そうです、本来の力」

電話（音）がなる

進藤

「じゃ、お二人とも、お願いしますよ、センサー」（出て行く）

乗本、一瞬、電話を取りに体を動かすがやめる。

乗本

「あ・・・剛力さん、電話ですよ。」

道力

「わかってるよ、なに、そんなに嬉しい？」

乗本

「そりやそうですよ。今日から電話番解放！ですから」

剛力

「はいはい。（受話器を取る）はい、岸田病院、病棟109です。・・・ええ、・・・ああ・・・はい、いらっしやいます。ちよっとお待ちいただけますか。乗本さん、電話ですよ」

乗本 「え、俺ですか？・・あらら、なんだか、すみませんねえ。」（電話を取る）「もしもし、乗本です。・・なんだ、田中か。びつくりしたなもう、で何？・・ん・・ん・・なんで・・なんで、俺の顧客リストがいるわけ？・・太田が？・・いや、支店長代行になったからってそれはよう、・・そんなの担当で検索すればわかるだろ。・・え？、お前が回るの？・・わかつたよ・・パスワードは・・うん・・アムロイキマス、全部ローマ字で小文字。イキマスのまは ma でなくて maa ・・だからアムロイキマアアスだ・・なに笑ってんだよ・・お前、感謝しろよ、ほんとに。・・ああ・・ああ・・（先方に切られる）」「なんだよそれ・・」

剛力 「アムロイキマアアスですか」

乗本 「だめですよ、盗み聞は」

剛力 「なにが、聞こえるでしょ」

乗本 「社内のデータベースのパスワードなんですよ。秘密ですから、よろしくお願いします」

剛力 「秘密って、誰に話すんですかそんなこと・・っていうか、そんな感じでいいんですか？パスワード」

乗本 「え？」

剛力 「乗本さん、支店長でしょ」

乗本 「それと関係ないしょ。若いときから変えてませんよ」

剛力 「そうなんですか。おもしろいパスワードですね」

乗本 「気分ですよ」

剛力 「気分？」

乗本 「顧客リストは営業マンにとっては戦場みたいなもんですから。入るとき、気分あげないといけないんです」

剛力 「入るとき？」

乗本 「データベースにですよ。誰がいつどんな目的でどんな車を買ったか、どんなサービスを受けてきたか、全部入ってるんですよ。毎日、それをチェックするんですよ。」

剛力 「へー、なんか仕事してますね」

乗本 「そりゃそうですよ。偵察です。できる営業マンはそこでどれだけ先手を打てるかですからね。」

剛力 「先手？」

乗本 「そうです、だからこうー、アムロいきまーすって気分でデータベースに入るんです」

剛力 (ハイハット…イントロ的な)

剛力 「あー、でもね、車検とか定期点検とか、車屋さんからよく電話かかってくるでしょ。ああいうの、なんか、かんべんしてほしい」

乗本 「そうですか？」

剛力 「そりゃそうでしょ、なんか、覗かれてる感じがして」

乗本 「それは直観力がにぶいディーラーに当たったからですよ。」

剛力 「直感力？」

乗本 「タイミングを計る感覚っていうものが重要なんですよ」

剛力 「へー」

乗本 「車検なんか、早めに知らせていいお客さんもいるし、ぎりぎりですらせたほうがいいお客さんもいるんです。」

「だから、あー、そこか！、とか、くる！とかリストから感じるんですよ！」

剛力 「ほう・・・」

乗本 「剛力さんは今、何乗ってるんですか？」

剛力 「ああ、何。今、くる？」

乗本 「まあ、一応、いい流れかなとも思っています」

剛力 「ベントですけど」

乗本 「え・・・、あ、ああ、そうですね、何年目ぐらいですか？」

剛力 「結構、立ちますけどね」・・・

乗本 「へーそうですね。買い替えの時はぜひお声をおかけくださいね」

剛力 「いやー、国産に替える気はないですよ」

乗本 「あら、ばさつときますね。どうしてですか？」

剛力 「仕事柄、あのロゴがいるんですよ」

乗本 「ロゴ？」

剛力 「ええ・・・まあ、人間は形に弱いでしょ。あのプロペラみたいなロゴさえついてればいいんです。」

乗本 「ああ」

剛力 「中古でもね」

・・・

剛力 「乗本さん、ガンダム世代なんですよ」

乗本 「え」

剛力 「アムロいきまーすって」

乗本 「ええ、よく見えましたから。剛力さんもそうでしょ？」

剛力 「うーん、いや、それがね、なんかピンとこないんですよ」

乗本 「ガンダムは1979年4月から放送ですよ」

剛力 「さすが、くわしいね」

乗本 「好きでしたからね。僕が小学生の時ですよ」

剛力 「へえ、じゃ俺は中学ぐらいか。なんかね、ビッシツと記憶されていないのよ。子供たちがしかたなく戦場に出されてしまう話でしょ。アムロが「アムロいきまーす」って出陣して、「みぎか！」とか、「シャーか」とか言ってたのは覚えてるんだけど。アムロの声とかは記憶あるんだけどね」

乗本 「声は古谷徹ですね。巨人の星、星飛雄馬でしょ。」

剛力 「そうそう、それは見たような。懐かしすぎる。え、てことは、アムロも結構歳とったのかな」

乗本 「60歳ぐらいですかね」

剛力 「そっかあ、でも、今でもたまにあの声聞くよね。声って年取らないのかね」

乗本 「そういわれば、そうですね。」

剛力 「なんか、アムロって内向的っていうかM的というか。」

乗本 「ええ、M・・・ですかね。でも、ガンダムにはびったりですよね。」

剛力 「やっぱ、好きだったんだ」

乗本 「あの番組からロボットアニメの新しい流れがはじまったんですからね。」

美波入ってくる。自分のベットへ

剛力 「新しい流れ？・・・ああ、ずっとやってるみたいね、ガンダムシリーズ」

乗本 「ガンダムって、ロボットがすごいつてのがなくなっただすよね。もっと人間に身近になってきたっていうか。人間と一体になってこそっていうか・・・」

剛力 「でも、兵器だよね」

乗本 「違いますよ、モビルスーツですよ。」

剛力 「あ、そうそう、モビルスーツ。身体拡張だよね一種の。」

乗本 「それはそうですけど、それは敵だっ一緒なんですよ。ザクとかドクとかね。そこがポイントではなくて・・・人間のほうですよ・・・右も左もわからないアムロが経験をつんで、戦争の中でいろんな人間と出会ったり、失ったり、成長するんですよ。目の前の戦争がいつのまにか私ごとになっっていくような」

(ハイハット音・・・チツ)

美波 「なんか、物騒な話だべ」

乗本 「物騒？・・・ですか？」

美波 「物騒だべ？戦争の中で成長って？」

乗本 「いや、アニメの話なんです」

美波 「あ、アニメの話、俺はそれではさっぱりわからないです。すいません」

乗本 「えーそうですか？ガンダム知りませんか？」

美波 「聞いたことはあるけどよ。」

乗本 「そんなもんですか？」

美波 「アニメってのはよ全く興味なかったな」

剛力 「ああ、そりゃ・・・そうかも」

美波 「あ、私なんかいいですから。話、続けてください」

乗本 「それと、アムロはニュータイプだったわけですね。戦場の体験から生まれた進化で・・・」

剛力 「特殊能力。俺も欲しかったなあ子供の頃。誰でも一度は欲しくなるよね、超能力」

乗本 「え？」

剛力 「エイトマン、ウルトラセブン、レインボーマン・・・」

乗本 「いや、そういう特殊能力じゃなくてですね、ニュータイプっていうのはもっと人間の本来的なものっていうか」

剛力 「でも、要は能力が欲しいんだよね、人間はね。やっぱ。」

乗本 「そう言われるとそうかもしれないですけど・・・けど、最後のほうでアムロが同じニュータイプのララと戦うことになっちゃったところがあつてですね。その、ララを殺してしまうんですけどね。真に分かり合えるのに殺しあうところがですね。」

剛力 「テレパシーだろ、俺も欲しかったわ。好きな女の子をじつと見て俺の心の声聞こえないかなとか、やった。」

乗本 「いや、そこじゃないんですよ！」

剛力 「え、やらなかった」

乗本 「ま・・・やりましたけど」

剛力 「やるよね」

乗本 「・・・いや、そういう私がどうのこうのじゃなくてですね」

剛力 「いや、そうかな、結局、自分だろ」

乗本 「え？」

剛力 「わたしがどうこうじゃなくて、って考えるのも自分だろ？」

乗本 「何をいつてるんですか、アニメの話ですよ」

剛力 「だから、アニメでもさ」

乗本 「ええ？」

剛力 「ほしんだよ、自分の能力が」

(ハイハット音・チツ)

乗本 「・・・ええ、何ですか、そういうことじゃ」

剛力 「俺、コーラでも買ってくるわ」

乗本 「え、話途中じゃないですか」

剛力 であていく(下手)

乗本 「・・・あ、美波さん、美咲ちゃんと会いました？」

美波 「いいや、きどるんけ」

乗本 「はい、さっきまでここに。」

美波 「そうけ」

乗本 「いいお孫さんですよね」

美波 「どこが？」

乗本 「どこって、・・・いや、毎日、お見舞いにくるじゃないですか」

美波 「ただ、家にいたくないだけですよ」

乗本 「え？」

美波 「父親とね、そりが合わないというかね」

乗本 「ええ・父親って、美波さんの息子さんですか？」

美波 「そうです」

乗本 「へー」

美波 「あのよ」

乗本 「なんです」

美波 「剛力さんってのは頭いいね」

乗本 「え」

美波 「なんかよう、言葉に迷いが無いっていうかよ」

乗本 「あ、そう、そうですよね」

剛力 「なんか、うちの息子にすこし似てるは、あはは、すいません」

乗本 「似てる？」

美波 「いやいや、こつちが勝手に思ってるだけだよ」

乗本 「どこが、似てるんです」

美波 「いつも正しいんですよ。いやいや、悪い意味じゃないですよ。それはそれで立派ですよ」

乗本 「あ、はいはい」

美波 「でもよ、正しいまでいっちゃうと、融通も少なくなっちゃいますね。・・こりや、すみません」

乗本 「あはは、わかる、わかる」

美波 「でも、それはそれでいいですよね。かーちゃんと仲良くできればね」

乗本 「え、はあ？・・剛力さん、独身ですよ」

(ステア音)

美波 「独身け、ほう〜！」

乗本 「ほうつて？」

美波 「それは、大変だね」

乗本 「大変ですか？」

美波 「そうかい、独身け。そうかい、そうかい」

乗本 「大変ですか？」

(ハイハット音：チツ)

美波 「さてと」

美波、楽器を準備する

乗本 「え、練習ですか？」

美波 「みたらわかるべ」

乗本 「あの・・・」

美波 「なに？」

乗本 「近くで、その、聞いてもいいですか？」

美波 「はあ？」

乗本 「ああ、だめですか」

美波 「・・・」

乗本 「ああ、そうですよね」

美波 「・・・恥ずかしいですよ」

乗本 「あ、すみません」

美波 「・・・いいですよ」

乗本 「え、本当ですか、ありがとうございます」(美波でていく)

乗本 「あ、」(ビットの横にあるコーラと鞆からポテチを出し追いかける)

・・・(ドラム：イントロ的)・・・

しばらく誰もいない病室

美咲が帰ってくる。美波のベッドで横になる。

西田が入ってくる。美咲をみる。自分もベッド

で横になる。パンチをして脱力して瞑想（2、3

回繰り返す。イライラを落ち着かせているよう）。

（ハイハット音：チツ）

目を覚まし周りを見渡す。

美咲 「西田さん・・・それ、何ですか？」

西田 「え？」

美咲 「その、こうやってるの（パンチをする）」

西田 「ああ、リラクセーション法だよ。」

美咲 「効くんですか？」

西田 「いや、わかんない。」

美咲 「わかんないんですか」

西田 「ていうか、効くとかそういうんじゃないみたい」

美咲 「え、どういうこと？」

西田 「僕もまだ習い始めたばかりだからわからないけど、自分がどうのこうのって考えないっていうか・・・」

・・・

美咲 「えー、なんですかそれ、めんどくさそうですね。」

西田 「めんどくさい・・・たしかに。でも、めんどくさいからやってみようみたいな」

美咲 「さらに、めんどくさそうですね」

西田 「はは、そうだね。美咲ちゃんには無縁なもんだろね」

美咲 「でも・・・美咲もリラクセーションは欲しいです」

西田 「え、そうなんだ」

美咲 「なんかこうストレスみたいのありますから」

西田 「何か悩みとかあるの？」

美咲 「・・・」

西田 「あ、いや別に言いたくないなら言わなくてもね」

美咲 「・・・これから、どうしようかな・・・とか」

西田 「え」

美咲 「・・・働かないといけませんし、いずれ」

西田 「そっか。美咲ちゃん、今は、何してるの？」

美咲 「なんにもしてないです」

西田 「何にもしてないって？」

美咲 「はい」

西田 「はつきり言うね」

美咲 「何もしてないですから」

西田 「・・・どうして？」

美咲 「わからないです。」

西田 「・・・わかんないんだ。」

・・・

(ハイハット音：チツ)

美咲 「西田さんって研究が仕事なんですよね？」

西田 「え？」

美咲 「進藤先生がそう言っていました。」

西田 「あ、そう」

美咲 「いいですね。面白そうです。」

西田 「・・・それでも・・・」

美咲 「どうして研究員になったんですか？」

西田 「え、・・・なんで・・・だろうね。・・・理系だったからかな」

美咲 「それだけ？」

西田 「なんでだろうね」

美咲 「理科得意だったんですか？」

西田 「ん。そうでもないよ。物理はだめだったし、化学も難しかったなあ。」

美咲 「ふうん、そうなんですか」

西田 「まあ、生物が残って、まあ、嫌いじゃなかった。それかな」

美咲 「へー、それで今、何の研究してるんですか？」

西田 「研究・・・なんてしてないよ」

美咲 「してないんですか」

西田 「うん・・・わかんない」

美咲 「わからないんですか」

・・・

美咲 「ごめんなさい、変なこと聞いて」

西田 「・・・いや、変なことじゃないよね。」

西田 「・・・美咲ちゃん、まだまだ若いし、何でもできるじゃん」

(ハイハット音：チツ)

美咲 「・・・お父さんもそう言いますけど、若いからどうのこうのって・・・関係ないです」

西田 「え？」

美咲 「それって、私に、関係ないことですよね」

西田 「え？」

美咲 「だって、私の年代で私だけ若いことないですし」

西田 「ああ、ごめん。確かにそうだよね。」

(ハイハット音：チツ)・・・

西田 「美波さんに会えた？」

美咲 「んんん」

バックに小さくサックス音色

西田 「どこ、行ってるんだらうね」

美咲 「稽古、ですネほら」（バックで小さく美咲のサクスが聞こえている）

西田 「あ、病院の裏山かな。行って見れば？」

美咲 「別にいいです。そのうち帰ってきますし」

西田 「帰ってくる？・・・はは、そうだね」

美咲 「西田さん、ジャズってわかります？」

西田 「え」

美咲 「乗本さん、おじいちゃんがジャズやってるのかっこいいって言うんですけど」

西田 「昔少しね、いや！・・・よく聴いてたよ。・・・ライブとかよく行ってた。」

美咲 「なんで、わかる？って聞くんですか」

西田 「はは、そうだね・・・」

剛力が入ってくる（コーラ持つてる。ベッドの上）

西田 「美咲ちゃんは美波さんとずっと一緒に住んでるの？」

美咲 「ええ・・・まあ」

西田 「じゃ、家でよく聴いたんじゃないの」

美咲 「んんん、おじいちゃん、家ではめったに聞かないです。」

西田 「そうなんだ」

美咲 「でも、「F」はすつごく家にありますよ、本棚にぎっしり」

西田 「そんなに？それは相当聴いてるよね」

美咲 「んんん、うちのお父さんジャズ嫌いだから。・・・昔の話だけとお父さんが凄い剣幕でおじいちゃんのレコードプレイヤーをハンマーで壊してたことがあります」

剛力 「ええ、何で？」

美咲 「・・・わからないです。私、小さかったし。怖かったことは覚えてますけど」

剛力 「その時、どうしたの美波さんは？」

美咲 「・・・いや、だまってじつと見てて、その後、出てったような記憶があります」

剛力 「美波さんってプロなの？」

美咲 「・・・プロじゃないと思います。最近まで保険の外交してたみたいですよ」

剛力 「へー。そうなんだ。・・・ところで美波さんはなんで入院してるの？」

(ハイハット音：チツ)

西田 「剛力さん！」

美咲 「さあ、はっきりしたことはわかりません。昔、コンサートやってる時に倒れて救急車で運ばれて、その時は、軽い狭心症だったらしいですけど・・・」

剛力 「けどって・・・？」

西田 「剛力さん、いいじゃないですか、そんなことは」

剛力 「え、なんで」

西田 「いえ、別に」

・・・

美咲 「・・・剛力さんはジャズってわかりますか？」

剛力 「ええ、まあ、ある程度は」

美咲 「ジャズがわかるってなんですか？」

剛力 「おお、すごい質問だね。・・・なんでそんなこと聞くの？」

美咲 「おじいちゃんの話をしてると、よく聞かれるんです。」

剛力 「ああ、そう。まあ、ジャズは、20世紀の初めにアメリカで黒人奴隷と白人の音楽が融合して生まれた音楽でね。時代と共にスウィング・ビバップ・ハードバップ・クール、

それに、モード・フリー、アバンギャルドって表現方法がこう進化・多様化してきたのよ。」

美咲 「めんどくさそう。歴史の勉強みたいですね」

剛力 「まあ、確かにね。それでね、それぞれの表現を作り出してきた偉人がいるのよ。ルイ・アームストロング、デューク・エリントンに、チャーリー・パーカー、ガレスピーね、あと、クリフォード・ブラウン、マイルス・デイビス、オーネット・コールマン、ジョン・コルトレーンって感じでね」

美咲 「剛力さんは全部聞いたんですか？」

剛力 「いやいや、さすがに全部は無理だね。でも俺はやっぱりチャーリー・パーカーが好きだな。コードを自由自在にあやつってね、バップっていう音楽の世界を切り開いたのよ。即興も始めてやりだしたしね。」

美咲 「即興？」

剛力 「アドリブのことだよ。その場でそれも瞬間的にフレーズを生み出すこと。これは今のいろんな音楽でも使われてるでしょ」

美咲 「じゃ、みんなジャズなんですか？」

(ステア音)

西田 「はは、いいね」

剛力 「まあ、現代音楽のほとんどが影響を受けてるよ」

西田 「・・・でも、僕は・・・あ、いや、マイルスは1975年にジャズは死んだって言ってますけどね」

美咲 「ジャズは死んだ？」

西田 「チャーリー・パーカーが死んだのが1955年ですよね。そのあたりがピークだったんでしょうかね」

美咲 「え、そんな60年以上も前がピークの音楽だったんですか？」

西田 「そうだよ」

美咲 「え、それじゃ、みなさん、直接聞いたことないんですか」
西田 「うん、そうだね。」
美咲 「そうなんですか。なんか、クラシックみたいですね」
剛力 「いや、西田さん。ジャズは今でも聴けますよ。そう
でしょ？」
西田 「ああ、ええ。でも、僕は、ほとんど聴かなくなりま
した。」
剛力 「どうして？」
（ハイハット音…チツ）
西田 「いや、いいですよ。僕のこととは。」
美咲 「すみません」
西田 「いや、・・・浅いんですよ。僕は」
剛力 「え？」
西田 「何やってたんだろって、思ったんです」
剛力 「そんな」
西田 「やって・・・いや、その、聞いているふりをしてただけなん
ですよ」
剛力 「ふり？」
西田 「ジャズが好きだっていうふりですよ」
剛力 「でも、好きだったんですよ」
西田 「ええ、でも、だから」
剛力 「好きならいいと思うけどな。ねえ、美咲ちゃん」
美咲 「・・・」
西田 「だから、僕は僕ってことで。」
（ハイハット音…チツ）
西田 「・・・」
剛力 「何かあったの？」

西田 「・・・マイルスが来日したことありましたよね」

剛力 「あ、30年、いやもつと前かな、確かに来たね」

西田 「マイルスを観た時、鳥肌が立ったんです。」

美咲 「へー」

剛力 「The king of Jazz だもんね」

西田 「ええ、でも、ジャズの演奏がどうのこうのじゃなくて、一瞬お互いに目があつた時があつたんです。僕の気のせいでしょうけど。その時、自分の全部が見透かされているような感じがしたんです。」

剛力 「貫禄あるからね、マイルスは。ビビるよね」

西田 「「俺にはお前は見えないう」って言われているような。」

剛力 「ふーん」

西田 「それ以来、なんかジャズが遠くなりました。」

美咲 「やってたんですか、ジャズ？」

西田 「・・・」

剛力 「でも、ジャズに終わりはないでしょ。」

西田 「そうですね」

剛力 「そうですね？」

西田 「終わつたつて思う人もいるんじゃないですか」

剛力 「え」

西田 「終わるつて人それぞれじゃないですか」

・・・ (ドラムハイハット…チツ) …

電話 (音) がなる

剛力 「はい、岸田病院、病棟109です。・・・はい、・・・はい、・・・あ、いらつしやいます。少々お待ち下さい。西田さん、電話です。」

西田 「あ、はい。(電話にでる)。はい、西田です。・・・はい、・・・迷惑をおかけしてすみません。・・・はい、はい

い・え、妻にですか・・・そうですか、わかりました。
ありがとうございます。失礼します。」（電話を切る）

「会社？」

「ええ、」

「見舞い？」

「違いますよ！」

「そう」

「・・・不自由ですね。手続きって。」

「不自由？」

「宛名はこの病院でって電話でお願いしたんですか」

「宛名？、書類かなにか？」

「ええ、登録してある連絡先の欄が優先されるんですね」

「はあ？」

・・・

乗本戻ってくる

「西田さんの奥さんってどんな方ですか」

「どうして、そんなこと、聞くの？」

「あ、今、妻って聞こえたので」

「あ、そう・・・」

「いえ、すみません。」

・・・

「え、何の話？」

「いや、何でもないよ」

「美咲ちゃん、やっぱかっこいいよね。美波さん。」

「そうですか」

「かっこいいよ。歳とか関係ない、みたいな、ね。」

「確かにね。美波さんって幾つぐらいなんだろう？」

剛力

乗本

美咲

乗本

剛力

乗本

美咲

西田

美咲

西田

美咲

剛力

西田

剛力

西田

剛力

西田

剛力

西田

剛力

西田

剛力

美咲 「えっと、たぶん、80か81です」

乗本 「へー僕の25ぐらい上かあ」

剛力 「あ、美波さんは、リアルにジャズを聴いてるかも。チャーリーパーカーが死んだの1955年でしょ15歳ぐらいじゃない」

乗本 「チャーリー？」

剛力 「チャーリーパーカー、へんなところで止めるなよ」

美咲 「そんなにすごいんですか？」

剛力 「僕たちにとってはね。ね、西田さん」

西田 「・・・」

乗本 「え、そんなに？」

美波、鼻歌（モーニン）を歌って入ってくる
（ドラム・イントロ的な）

美波 「何？・・・どうしたんです？」

剛力 「今のモーニンですよ」

美波 「え？」

剛力 「1950年後半、日本でヒットした。アートブレイキー、ジャズメッセンジャーズ」

美波 「いやいや、おはずかしい」

剛力 「美波さん、モーニンと出会ったのは何歳の時ですか？」

美波 「え、俺け？」

剛力 「そうです。いくつの時でした？」

美波 「ええ、そうだなあ、18か9ぐらいですよ」

剛力 「やつぱり。ジャズはハードバップか？」

美波 「いや、いや、お恥ずかしい。わすれてくださいよ。」

剛力 「ジャズがリアルだったんですね？」

美波 「いやいや、そんな難しいことは俺にはわかんねえです」

剛力 「美波さんは、その、いつからジャズをやられてるんですか？」

美波 「俺け？、いや、いいですよ、俺の話なんか。」

剛力 「聞かせてくださいよ。やっぱりチャーリーパーカーですか？」

美波 「チャーリーパーカーはすごいけどよ。俺はそれ聞いたのはジャズに入っただいぶたってからだっと思えますよ。初めて聞いたときはナベサダかと思いました。」

剛力 「ええ、渡辺貞夫ですか。」

美波 「そう、彼はうまいよね、いいね。」

剛力 「どんなことがきっかけだったんですか？」

美波 「きっかけ？」

剛力 「ジャズをはじめるきっかけですよ」

美波 「剛力さん。あんたもしつこいね。俺の話なんかつまないですよ。本当ですよ。」

乗本 「美波さん、僕も聞きたいですよ」

美波 「乗本さん、あんたもけ。本当につまらないですよ」

乗本 「ぜひ」

美波 「しかたないなあ・・そうけ、まあ、よ。戦争で負けちゃった後、アメリカの音楽や映画が一気に流れ込んできたんですよ。それはすごい勢いでした。戦争中はジャズは禁止されていたから、俺にとっては全部、はじめてだったんですよ。世の中にこんな音楽があるのかって感じですよ、もう。」

乗本 「そうか、美波さん、戦争経験してるんですね」

美波 「いや、知ってるっても終戦の時が4歳ですよ。防空壕の中にいたなあってことぐらいしか覚えてないですよ。」

乗本 「そんなもんですか？」

美波 「あと空襲がよ、花火みたいによ。それですごい音がするわけ」

乗本 「怖かったですか」

美波 「いや、おふくろとか、周りの人がすっごい顔して、ここで死ぬかもしれないけどみんな一緒だよって、その記憶はあるんですね」

・・・（ハイハット音：チツ）

美波 「とんでもないやな音だったですよ」

乗本 「そうですか、やっぱ大変だったんですね」

剛力 「生活も、大変だったんでしょ、きつと」

美波 「まあ、あのころ、そこぬけに貧乏はしましたよ。でも、それはみんな一緒ですからね。まあ、幸せだったかもしれない。ません。」

乗本 「幸せ？」

美波 「親父は戦死しちゃって記憶にほとんどないんですよ。なんか満州から帰ってきた叔父さんがいたんだけど、帰ってきても周りとそりがあわないちゅうか、三男坊だったし、仕事もないですしね。行方不明になってしまいましたよ。」

乗本 「苦労されたんですね」

美波 「俺は長男だったしね。確かにお袋はかけずり回ってましたけどね。でも、家ではひえであるうが高粱（こうりゃん）であろうが、うまかったしね。サツマイモ芋のつるなんて甘くて本当にうまいんですよ。」

美咲 「高粱って？」

剛力 「雑穀だよ。飼料につかわれているやつ。配給物ですよね」

美波 「そうです、そうです。でも、食えるってことはそれだけで幸せなんですよ。本当に・・・でね、うちには中学生のころかなラジオがあったんですよ。」

美咲 「ラジオ？」

美波

「そのラジオからジャズが流れてくるわけですよ。NHKでもね。ほんとに何とも言えなかったね。これまで聞いたことがない、いっちゃ悪いがアメリカの上流階級の白人の音楽ですよ。でも、すごく甘かったり、哀愁があったりしたんですよ。」

剛力

「スイング・・・ですか」

美波

「いやもう、なんだったてありですよ。始めて聞いてるんですからね。その当時は米国からきてるものは、タンゴであろうがルンバであろうが、全部ジャズですよ。。その当時、中学生の吹奏楽でチューバ吹いてたんですよ、ずっとサックスがやりたかったんですよ。」

乗本

「へー、全部ジャズですかあ。。。それで、いつからサックスを？」

美波

「いや、高三のときやと先輩の卒業で回ってきたんですよ。嬉しかったなあ。もう楽しかった。自分の部屋でラジオに耳くつつけて、音をこー、あーだ、こーだ、探るんですよ」

(ドラム・イントロ的な)

乗本

「録音なんてできなかった時代ですよ」

美波

「そうそう、もう、ずっと部屋でこーやって聞いてましたよ。よく、お袋に怒られました」

美咲

「おじいちゃん、引きこもりだったんだ」

美波

「あはは、そんなものだったですよ」

剛力

「好きなミュージシャンとかは？」

美波

「最初はグレンミラー・ベニーグットマン・・・」

剛力

「デュークエリントン？」

美波

「いや、黒人のジャズは最初のころはめったに流れなかったなあ。今考えるとあれは操作されてちまつたのかねーなんて、わかんないですけどね。だからあっちじゃなくて

こっちの・・・あ、なんていったけ、こっちがわ
の・・・」

「ウエストコーストですか？」

「そうそう、それそれ。ジェリー・マリガンとかアート・ペ
ツパーとか。好きだったんですよ。」

「ああ・・・上流というか白人系のジャズですね」

「すみません。だから、あんまり面白く無いでしょ。なん
ていうの、白人上流階級ジャズがきっかけなんて、おはず
かしいですよ。」

剛力 「あの・・・ベニーグットマンやグレンミラーとか、スウィ
ングジャズは第二次世界対戦中、兵士を鼓舞してた音楽だ
ったですよね」

(ドラムハイハット・・・チツ)

美波 「ああ、それけり。そうなんですより・・・でもよう、あの
ころはそんなこと知っちゃいないですよ。ただ、夢中だっ
たですから。すいません。」

・・・

西田 「どんな感じでしたか、ジャズやってる時って」

美波 「いや、そういわれてもなあ、・・・同じじゃないんです
かね、みなさんと。」

「同じ？」

美波 「俺はずっとビックバンドですけどね。そのメンバーとし
ての役割をちゃんとやろうって、そのう、思ってるだけ
です。こんなこといつちゃどうかとも思うんですが。お客さ
んにどう思われようがいいんです。バンマスに合格もらえ
れば。邪魔しちやたら申し訳ないですからね。」

西田 「そ、そういうもんですか？」

美波 「バンマスに迷惑かけたらバンマスのスウィングなんかで
きませんからね。」

西田 「迷惑ですか」

美波 「そうですね。みんなで船を漕いでるみたいなものですかね。迷惑かけてたらひとつになれないですよ」

乗本 「船かあ」

・・・

美咲 「・・・ひとつになる」

乗本 「いいよね」

美咲 「いや、わかんない」

乗本 「え？」

美咲 「そういうの、わかんないです。乗本さん、わかります？」

乗本 「え、・・・うーん・・・仕事、かな」

剛力 「仕事？」

乗本 「ええ、ちょっと違うかもしれないけど、私が入社したのは1986年。そのころからバブルが弾けるまで、すごく車が売れたんですよ。輸入車の販売台数も伸びてきて、とくに高級車クラスでは輸入車との競争も激しくて。それはもう営業所がひとつになってました。ディーラーの動きもお互いすごくわかって、紹介のタイミングとか、配車の流れとか。僕も周りに迷惑をかけないように必死でした。」

(ドラマ・イントロ的)

剛力 「アムロイキマアス、ですか」

乗本 「そうですね。まさに、毎日、出陣してましたよ。」

美波 「乗本さん、それぞれ、一緒ですよ。俺も38年サラリーマンやりましたからね。わかりますよ。」

乗本 「え？そうなんですか」

美波 「そうですね。でも、そのバブルがはじけたあと会社も大変になっちゃいましたね。会社時代に知り合ったお客さん相手に自分で保険業を始めたんです。で、またジャズを始めたんです。おはずかしい」

西田 「じゃ、ずっとやってたわけじゃないんですか？」

美波

「そうですね。また、始めて20年近くたちましたかね。こっちはうが長い感じしますよ。俺のジャズはあのころのままですがね。お恥ずかしい」

乗本

「いえ、ぜんぜん、かっこいいですよ。美波さん。ずっと体の中にジャズが生きていたんですね」

美波

「嬉しいこといつてくれるね。乗本さんもいいビジネスマンだったんだらうね。」

乗本

「え？僕ですか。ていうか、過去形ですか？」

美波

「いやいや、ああ、すいません」

乗本

「いえいえ、全然です。でも、あのころは、いつも営業所でドリだったですよ。あはは」

剛力

「でも、今、支店長でしょ」

乗本

「まあ、やっと、下からもどんどん上がって来るし、しかたなく、どうぞって感じですかね。自分では全然しっくりしてません。あの頃のが楽しかった。」

剛力

「そうかあ」

乗本

「入社したころは24、5ですから。自分と同じ世代がちようど車を自分で買うっていう感じでしたから。友達もよく買ってくれましたよ。」

剛力

「それはいつの新入社員も一緒じゃ」

乗本

「ちがいますよ。60年代生まれで20代でしょ。車は夢を運んでたんですよ」

美咲

「夢？」

・・・

乗本

「そう。スーパージェットって知ってます？」

剛力

「しってるよ。あれは、僕も好きだった。流星号でしょ。でもあれ、白黒番組じゃ？」

乗本

「そうです。でも再放送で何度も見ましたよ。流星号・流星号応答せよって、自分の車を呼ぶんですよ。もう、自

分の分身っていうか、あれ、もうあと少しで実現しますよね」

「確かに。自動・無人運転の時代はそこまできてるもんな」

「ちよっと言い過ぎましたね。でも、僕の人生、いつも車があったんです。流星号でしょ、マツハ号でしょ、ウルトラセブンのポインター号、バットマンのバットモービル、それにナイトライダーのナイト2000・・・それと・・・」

「なんだかジャズみたいですな」

「いや、いや、それは違うよ。芸術じゃないし」

「でももともとは一つだったんですよね。車も」

「ああ、そうだね」

「確かね、ガソリン車の1号はね確かベンツ、あ、剛力さん、ベンツが作ったんですよ。」

「ああ、そう。なに、まるで乗本さん、子供だね」

「え？、50代の男子ならみんなそうでしょ」

「50代の男子って・・・」

「実際、自家用車だって、居住性がどんどん良くなって、人間に一体化してきてるでしょ。エアコン、カーステ、パワーステアリング、パワーウィンドウでしょ、オートマにカーナビ・・・」

「乗本さんは今、何に乗ってるの？」

「え、俺、ああ、これですよ。これ、（枕元のミニカーを持ってくる）これ、ローラ！」

「さすが、おたくの会社の代名詞だね。ていうか、なんで持ってるの。」

「お守りみたいなもんです」

「お守り？」

「ええ。ローラは大衆車ですけど、我が社の最新技術を必ず搭載してるんです。これは内緒ですけど、お客様にとつ

て、もっとも未来に対してコストパフォーマンスが高い車なんです。」

「うまいこというね。さすが、営業マン」

「こいつは僕の未来に最高の技術で寄り添ってるんです。いつも。僕はずっとこれに乗ってますし、一生これでいいです。」

「それって、会社からの賞かなにか」

「え、別に、自分で買ったんですよ。」

「買ったんだ、自分で」

「乗本さん、いいんじゃないですか、それ。素敵ですよ」

「でもさ、未来はドライバーがいなくなるんだろ」

「剛力さん」

「ナビが出てきた頃からどうも車に乗せられてる気がしてさ。乗本さん、どうよ？」

「え、それは・・・」

「いや、それはそれで、いろんなものがでてくんじゃないの。」

「すきなところに連れてってくれればいいんじゃないですか」

(ドラムハイハット…チツ)

「連れてってくれるって、本質的になんか違うでしょ」

「それは・・・そうですね。でも、きっと用途によって特殊化するとか・・・ですね」

「乗るか、載せられるかか。」

「それは・・・」

「俺はどっちでもいいけど・・・ああ、でも、安全第一だよな・・・」

進藤が入ってくる（モニター用のタブレットを
持っている・美波のところへ）

「なにが安全第一ですか？」

「え、いや、車の話です」

「車？、車の外出は禁止ですよ。」

「剛力さん、何が安全第一なんですか？」

「え、いや、車もこいつみたいになつてくのかなつて（セ
ンサーを見せる）」

「え？どういうことですか？」

「やっぱ事故はだめだよ。なくさなきゃさ」

「ええ」

「だから、（センサーを見せる）こういうことが最も優先
される時代になっていくのかなあつてさ・・・あ、ドライ
ブレコーダーつてそういう方向でしょ」

「・・・」

「美波さん、ちょっと横になつてください」

「え？、わしけ」

「ちよつと心臓の音聴かせてくれますか。こつち向きに
（上手がわ）お願いします。」

（モニターをしばらく見ている・そのあと、脈をとりなが
ら、聴診器をあてる）

「息を吸ってください・・・はい止めてください（10
秒）・・・はい、普通にしてください。・・・はい、息を
吐いてください・・・はい止めて（10秒）・・・はい、
普通にしてください。もう一度お願いします。はい、吸っ
て、止めて（5秒）・・・はい、吐いて、止めて（10秒以
上長い）・・・はい、いいですよ」

（繰り返ししているうちに乗本↓剛力も息を合わせてしま
う・）

美咲 「ははは」
進藤 「うん？」
美波 「何か、変け？（進藤に）」
進藤 「いえ・・・今日、興奮するようなことはありません？」
美波 「そうでもないですけど」
進藤 「血圧が、ちよつと今日は高めなんですよね」
美波 「そうけ」
進藤 「ふらつとしたり、めまいとかなかったですか？」
美波 「なかったですよ」
進藤 「そうですか、今日ですよ。よく思い出してみてください」
美波 「すみません。進藤先生は若いのに厳しいなあ」
進藤 「若いのは余計です」
美波 「若いのはよけいかい。それは失礼しました。」
進藤 「ああ、みなさん、気にしないで、お話続けてください」
(モニターを見る)
・・・
剛力 「・・・続けてといわれても。なんだっけ」
乗本 「先生、僕たちは、いいんですか」
進藤 「ええ？」
乗本 「いや、その、脈とか、心臓とか」
進藤 「え？」
剛力 「いや、」
剛力 「・・・気持ちいいんですよね、聴診器の冷たさって」
進藤 「あゝ、そうですか、じゃ、みましようか」
剛力 「え、ああ、いや・・・別に、」
乗本 「あの、聴診器って万能なんですか？」
進藤 「ええ？」

剛力 「心拍はこれでとられてますよね（腕をあげる）」。」

進藤 「ああ、心拍、心電図と、心音は別ものですかね」

乗本 「別物？」

進藤 「ええ、心臓は収縮したり、拡張したりして肺や体内に血液を送ってますよね。心拍はざっくりいうと心臓の収縮命令、電気信号です。よく医療ドラマで、ピッ、ピッっていつてるやつです。」

乗本 「へー、あれは動け！、動け！って言ってるんだ」

進藤 「まあ、そうです。心音は、実際に動いた時の心臓の音なんですよ。」

乗本 「心臓が動く音、なるほど」

剛力 「そりゃ、そうだろ」

進藤 「ええ、どつくん、どつくん、どつくん（どつくんで手を一回握るリズムを見せる）こんな感じかな」

乗本 「ああ、どつくん、どつくん・え、でも、どつくん？」

進藤 「え？」

乗本 「くん？って」

進藤 「ああ、基本2つの音なんですよ」

乗本 「2つの音？」

進藤 「聞こえてるのは心臓のベンの音です。最初のドッは左心室のベン、僧帽弁が閉まって、大動脈ベンが開く音、で、心臓が収縮、で、次のクンは大動脈のベンが閉まる音なんです。ドッが低くて、くんは少し高い音。どつくん、これで一回収縮、どつくん、どつくん、どつくん（手をリズムに合わせてにぎる）、こんな感じ」

剛力 「じゃ、命令と合わせると、ピどつくん、ピどつくん、ピどつくん・・・」

進藤 「ええ、さすが剛力さん、そんな感じですよ。ピは聞こえませんがね。」

美波（ピどつくん、ピどつくん、ピどつくんとリズムを取り始める（音））

「へー、なるほど」

「ちよつと先生・・・その聴診器かしてもらえませんか？ちよつと自分の心臓の音、聞いてみたいんですけど」

「やっぱり、乗本さん言うと思った」

「いいですよ」（わたし）

（耳につけ）「これ、あれ、どっちで・・・（たたこうとする）」

「あ、叩かない！・・・絶対に！、耳痛めますよ。」

「すみません」

「どっちつかつてもいいですよ。じゃ、膜型、いや、広い方を胸にあててみたらどうです？」

（心臓にあてる）「おー聞こえる・・・おお・・・お・・・お・・・お・・・お・・・ん・・・ん・・・ん・・・ん？」

（バスドラ・・・心音）

「どうかしました？」

「いや、どつくんっていうよりどつくくん、どつくくん・・・つって・・・え・・・」

「ああ、心配いりませんよ。2つ目の音は大動脈ベンと肺動脈ベンの音なんです。なんで、2つ聞こえる場合もあります。乗本さん、耳いいですね」

「え、そうですか」

「ええ、聴きわかるのに練習のいる人もいますよ」

「乗本さん、嬉しそう」

「ほんと」

「久しぶりですよ、褒められるの、美咲ちゃんの心臓の音もきいてあげようか」

剛力 「言うと思った」

美咲 「いや、結構です」

剛力 「乗本さん、俺にも貸してくれよ」

乗本 「え、なんですって？」

剛力 「だから、貸してって」

乗本 「もう、しかたないなあ、いいですよ」（渡す）

剛力 「おお・・・おお・・・するする。へ・・・ちよつと、乗本さんの聴かせて」（乗本の胸に当てようとする）

乗本 「いやですよ」

進藤 「・・・西田さん、も聞いてみますか？」

・・・

西田 「・・・え、あ、まあ・・・」（剛力、聴診器を西田に渡す・西田、つける・・・聞く）

（バスドラ心音）

進藤 「どうですか？」

西田 「え？、どうですかって？」

進藤 「不思議だと思いませんか？」

西田 「何がですか？」

進藤 「西田さんが何も考えてなくても動いてるんですよ、心臓って」

西田 「ええ、まあ。自律神経支配ですからね」（西田、聴診器を進藤に返しながら）

進藤 「そうですね、さすが。でも洞房結節にある心筋細胞は単独でもリズムをとるんです。・・・西田さんならそれも知ってますかね」

西田 「え、まあ」

・・・

進藤 「でも、そのリズム、心拍とは直接、関係ないんですよ」

西田 「え？」

(間・・進藤、タブレットのモニターを見る)

「え？、どういうことですか？」

「人間の体って、知らないことがすっごくいっぱいおこってるってことですよ」

「はぁ・・」

「血糖値が上がってきたなんて気づかないでしょ？」

「そりゃ、そうですね」

「心臓や血糖値ことなんて知らなくたって人は生きていきますよね。心臓の細胞・脾臓の細胞もみなさんのことなんて知らない。・・だから、健康第一ってことです。」

「でも、長い進化の中でもどうしてずっと気づかないんですかね」

(ドラムバスドラ・・心音)

「・・それは、きつと意識できないほうがいいことかもしれないあるってことです。」

「え？」

「・・あ、いえ、別に。美波さん、なんか少しでも気にかかることがあったら言ってくださいね。」

「わかりました。お世話かけます」

「お願いしますよ。」(進藤退出)

「進藤先生ちゅうのはいい女だね」

「おじいちゃんの好み？」

「死んだばあさんにちよつと似てるかも」

「おじいちゃんって、おばあちゃんに似てる人多いよね」

「そうけ、・・そんなことより、ぼちぼち帰んな」

「美咲ちゃんて、美波さんに話あったんじゃ」

「んんん、別に」

乗本 「え？そうなの」

美咲 「ここ結構、気に入ってるんです。」

乗本 「はあ」

美咲 「でも、そろそろ、かえります。．．それじゃ、みなさん。さようなら」(美咲退出)

乗本・剛力 「またね」・「さよなら」(西田、手を振る)

．．．

乗本 「今日の夕飯なんですかね」

剛力 「はあ、今日もまた、そういう時間か」

乗本 「そうですね。だんだんバカになっていくような」

剛力 「体もなんかこう、しゃきつとしないしね」

乗本 「体もバカになってる？」

剛力 「そうかもな、」

乗本 「卓球でもいきますか？、メシ前に」

剛力 「そうだね、そうするか」

乗本 「まあ、相手になってあげますよ」

剛力 「それ、どういう意味よ。こっちだろ、相手になってあげてるのは」

乗本 「え、はいはい」

剛力 「え、はいはいって何？」

乗本 「行きましょう。行きましょう。．．．西田さんもどうです？卓球。」

西田 「あ、いや、僕はいいです。」

乗本 「あ、そうですね。．．．じゃ、行きましょ」

乗本・剛力退出

．．．

美波 「卓球、いつてくれればいいじゃないですか」

西田 「いや、今はそういう気分じゃ」

美波 「・・・西田さんは複雑そうですね」

西田 「・・・いや、そうでも」

美波 「また余計なこと言っちゃまった。すみません。」

西田 「美波さんはジャズがあつて、なんかいいですね。」

美波 「え、なんです。いきなり・・・西田さんは研究者だべ。尊敬しちゃうけどね。俺なんか・・・」

西田 「美波さん。我々の世代ってどう思います？」

美波 「え？なんですいきなり」

西田 「僕、1965年生まれなんですけど」

美波 「若いなあ」

西田 「いや、若くはないですよ」

美波 「いやいや、俺からみりや、まだ、まだ」

西田 「僕には、何にも残ってないんですよ」

美波 「そんな、何をいつてるんですか。わけもんが。一生懸命、研究してるんですよ」

西田 「いいえ、全然」

美波 「なんか、あつたんけ？」

西田 「いえ、取り立ててはないです」

美波 「やっぱ、複雑そうだね。頭のいい人はいろんなことを考えるからね」

西田 「あの・1965年って戦後から20年しかたつてないじゃないですか。それで、今から20年前って思い出しても、自分、やってることってほとんど一緒ですよ。だから、美波さんたちの世代の人は戦後、とてつもなく働いて、とてつもないものを作ってくれたんだなあってつくづく思うんです。」

美波 「そうけ」

西田 「例えば、新幹線、団地、車・テレビ、ゲーム、音楽や映画・・・何にもなかったところからです。」

美波 「幸せじゃないですか」

西田 「ええ、それはそうなんですよ。・・・でも・・・あの・・・ファミリーストランのメニューって見たことあります？」

美波 「え、メニュー？」

西田 「ええ、あの硬くて薄いやつです。これまでずっと、メニューの中から美味そうなものを選んできたような。」

美波 「今は美味しいものがいっぱいあるからなあ」

西田 「ええ、そう、美味しいです。美波さんたちの時代の人が一生懸命作ってきたもの。それを、どうぞ、召し上がって、だされているみたいな」

美波 「いいことじゃねーのかい」

西田 「ええ。でも、また、すぐ、メニューが変わって、また美味しくて、その繰り返し」

美波 「繰り返し？」

西田 「みんなそうです。📺にアニメ、歌謡曲、お笑い、ゲーム・・・みんな、皿にのせられてきて・・・それを選んできただけ、選んでは捨て、選んでは捨て・・・くりかしてきただけ。」

美波 「確かに、いろんなものがうようよ出てきましたね。俺にはちんぷんかんぷんですよ。」

西田 「そうです。そのちんぷんかんぷんに追いつかねばって・・・」

美波 「いいんじゃないんですか、それで。」

(ハイハット・チツ)

西田 「選択とか判断とか・・・何をしてきたんだろって」

美波 「そんなことは・・・西田さんも乗本さんのように一生懸命働いてきたんでしょ」

西田

「ええ、それは、たぶん。でも、自分もメニューの一つだ
っただけです。」

47

美波

「俺には難しいことはわかんねーな。」

西田

「もう選ぶのも選ばれるのも疲れました」

暗転

2.

1日目夜

深夜

カーテンでそれぞれ分離

スポットライトが各々全員のベットに

美波…鼻歌を歌いながら運指の練習

西田…枕を後ろに上半身を立ててマインドフル

ネスをやっている(時々パンチ)

剛力…カバンから書類を出し読んでいる。

乗本…車雑誌を読み、時折ミニカーを見ては見

比べている。

(しばらく、各々の動きのみ)

「剛力さん、センサー穴一つきつめですよ」

「はいはい」

乗本 (寝る準備を整えながら) 「あ、あの昼間言ってた、安全
第一とセンサーってどういう意味です」

剛力 「え?・・あり、なんか安全第一も健康第一も似てるなあ
て思ってた」

乗本 「どういうことですか?」

剛力 「人間もどんどん健康になって長生きになったらろ、それで、これからどうなっていくんだってね」

乗本 「え？」

剛力 「終戦までは50ぐらいだったらしいよ。平均寿命。それが今は85歳？。30年以上も違うんだよ。昔なら、俺たち幽霊でも不思議じゃ無い。」

乗本 「幽霊って、・・・ええ、まあ、そうかも」

剛力 「まあって。どう思うよ」

乗本 「いいことでしょ。長生きって」

剛力 「まのびしてるのかなあ」

乗本 「え」

剛力 「昔の寿命で換算すると、俺たちって30代だよ」

乗本 「ええ」

剛力 「計算すればさ」

乗本 「30代・・・若いなあ」

剛力 「若いっていうかさ、薄い」

乗本 「薄い？」

剛力 「そう。脳みそ？」

乗本 「脳みそ？」

剛力 「使わなくなったんじゃないの体の健康のおかげで」

乗本 「そんな、みんな仕事とか頑張ってるでしょ」

剛力 「そうかな。乗本さん、頭使ってるって言い切れる？」

乗本 「それは・・・」

剛力 「案外、そんなに使っていないと思うな俺は。体は健康、車は安全・・・どうなっていくんだらうね。」

乗本 「うーん」

剛力 「とにかく、俺はここを出たいよ。はやく。」

乗本

「それは俺も一緒ですよ」

剛力

「じゃ、俺は寝るよ」

乗本

「おやすみなさい」

・・・

剛力も寝る、明かりを消す。

美波、運指の練習をやめて明かりを消す（しかし鼻歌は
続けている）

（瞑想している西田だけにスポット）

暗転（鼻歌小さくなる）

3.

二日目 昼

明転（部屋にだれもいない）

明美が入ってくる。部屋の様子を伺う

電話（音）がなる

剛力が走って入ってくる

剛力

（明美を素通りして電話に出る）

「はい、もしもし、岸田病院、病棟109です。・・・あ、
鈴木さん、どうも、僕です。・・・いや、ご心配かけま
してすみません。・・・え、それ、なんとかありません
かね、・・・ええ。・・・ええ。・・・ああ。・・・はい、確か
に前もって言ってくれたのは・・・あ。・・・はい。でも、こち
らとしても今代わりの方を探してまして、それまで少し待
っていただけわけには・・・あ、はい。・・・たぶん今日あ
たりにはいつ退院できるかわかると・・・え、はい。・・・
とにかく退院してから・・・ええ。・・・すみませんがよろしく
お願いします。・・・はい、どうも電話ありがとうございました
ます。」（電話を切ってつ自分のベットへ）

（明美、電話をしている剛力を見て、途中で思い出す・半
信半疑）

明美 「あ・・あの」
剛力 (手帳を見る) 「あ、はい・・」
明美 「ごうりき・・さん？」
剛力 「あ、はい・・？」
明美 「・・すすむ？・・さん？」
剛力 (ハイハット…チツ)
剛力 「え・・え・え、うそ」
明美 「え？・・すすむでしょ」
剛力 「え、何、え、・・え、明美？」
明美 「うん」
剛力 「え〜うそ、なにしてんの？」
明美 「久しぶり〜」
剛力 「おお、おお・・え」
明美 「元気だった？」
剛力 「え、いや、ていうか、何で、何でここにいるの？」
明美 「え、そっちこそ、え？、どっか悪いの？」
剛力 「あ、俺、今ここに入院してんだよ」 (自分の近くの椅子に促す)
明美 「大丈夫なの？」
剛力 「ああ、まあ、大したことはないんだけどね」
明美 「そう、そうなんだ、へ〜」
剛力 「へ〜、明美・・なんか・・」
明美 「え〜、ちよつと、そんなみないですよ。」
剛力 「あんまり、かわってないね」
明美 「ないない、すすむは意外と若いね」
剛力 「意外って、何・・今、何してんの？」
明美 「え、専業主婦。・・すすむは？」

剛力 「行政書士やってる」

明美 「え、製薬会社は？」

剛力 「あ、だいぶ前にやめたよ。」

明美 「研究好きだったじゃん。」

剛力 「製薬会社の研究はちよつと合わなかった」

明美 「内定の時はあんなに喜んでたのに」

剛力 「うん。でも、すぐやめてしまったよ」

明美 「そうなんだ。・・・なんでまた、行政書士？」

剛力 「まあ、会社入っているいろ、まあ、いろいろ、考えたんだよ。・・・で・・・結局、人間は書類の上で生きてるって」

明美 「え、書類？」

剛力 「そう、証明書とか申請書とかさ。学校、会社、活動、税金、資産、相続、保険・・・みんな手続きがないと生きていけないんだ。普段気がついてないけどね」

明美 「なるほど」

剛力 「だから、証明書や・申請書を作る仕事は食いつばぐれがないって思ってたさ、「面倒だしね」

明美 「へーすすむらしいね。はっきりしてるね。・・・あのさ、いまだに自分の寝言で起きたりしてんの？」

剛力 「え！、いきなり、何だよ」

明美 「だって、ポルターガイストみたいだったしあれ」

剛力 「おいおい」

明美 「犬が唸っているっていうかさ」

剛力 「・・・」

明美 「こっちまで犬に噛まれそうな夢、見てたし」

剛力 「あのさ、人のことよく言えるね。明美だって」（西田をみる）

明美 「え？・・・あ・・・」
剛力 「え？」
明美 「あ、ごめん・・・なさい。ちょっと」（立ち上がる）
剛力 「どうしたの？」
明美 「うん、いや」
剛力 「何？」
明美 「届いたよ。書類」（西田のところへ）
剛力 「え？」
西田 「あ、ありがとう。・・・剛力さん、知り合い？」
明美 「え・・・あ、うん。・・・私もびっくりしたよ。・・・こんなところで、ばったり。」
剛力 「・・・」
西田 「大学の時の？」
明美 「・・・んんん・・・うん、研究室の先輩」
西田 「・・・へー、そうなんだ。剛力さん、あの、妻です。」
剛力 「え・・・あ、はい・・・」
西田 「・・・」
剛力 「いや、本当に俺もびっくりしたよ。なんかね、まさか、こんなところだね、」
西田 「ええ、よろしくお願いします。」
剛力 「え、いや、こちらこそ」
・・・
明美 「本当にやめるつもりなの？」
西田 「うん。これ以上いても、なんか、」
明美 「でも・・・あと少しで定年でしょ」
西田 「ここじゃ、なんだから、談話室に行こうか」
明美 「あ、うん」

剛力 「いや、俺がでてくよ」

西田 「ああ、いや、そんないいですよ。」

西田・明美退出（下手側へ）

三者会釈

剛力、自分の書類を見るが落ち着かない

（ハイハット・忙しいチキチキ）

進藤入ってくる（手にカウンスリングスケジュー

ール）

進藤 「剛力さん、皆さんは？」

剛力 「あ、ちよつとわかりません。西田さんは奥さんと出てきました」

（ハイハット・チツ）

進藤 「え！奥さんいらつしゃってるの？」

剛力 「・・・」

進藤 「・・・」

剛力 「ええ、なんですか、その反応」

進藤 「え、いや・確か、初めてでしょお見舞い」

剛力 「そうなんですよ。それでつていうか、びっくりしましたよ、」

進藤 「剛力さん、お会いしたの？」

剛力 「はい」

進藤 「どんな方だった？」

剛力 「え？」

進藤 「奥さん」

剛力 「え・・・先生、気になるんですか？」

進藤 「あ、いえ、別に・・・西田さんもいろいろありそうですか」

剛力

「メンタル・・・ですか？」

進藤

「ええ？、ああ、まあ・・・そんなことは言えませんが」

・・・

剛力

「まあ、ハキハキしてて、そうですね、自己主張もしっかりで、無駄なことはきらい、そんな感じですかね」

進藤

「・・・え？」

剛力

「あ、いや、そんな感じっていうか」

進藤

「へー、きれいな方？」

剛力

「きれいか、かわいいかと聞かれたらきれいな方でしょうね」

進藤

「なんですか、その言い方」

剛力

「え？、いえ。きれいだったですよ」

進藤

「へー・・・で、どんな感じでした？」

剛力

「何がです」

進藤

「その、二人の仲っていうか・・・」

剛力

「うーん、そこまでは・・・えー気になりますか？」

進藤

「・・・お二人は？」

剛力

「談話室です。西田さん、・・・会社やめるんですかね」

進藤

「え？」

剛力

「奥さんがなんか書類を持ってきましたよ。先生、なにか知ってます？」

進藤

「いえいえ。」

剛力

「ちよつと様子見てきましようか？・・・気になりますよね（行こうとする）」

進藤

「え・・・あ、ところで剛力さん、昨日はぐっすり眠れましたか？」

剛力

「ええ？、あ、いや、たぶん」

進藤

「朝は」

剛力 「え、はい。だいぶ、その、はい・・・」

進藤 「それはいいですね。・・・あ、そうだ。このプリント、みなさんに配っていただけますか、今日の院長カウンセリングのみなさんのスケジュールです。」

(ハイハット・チツ)

剛力 「ええ、来ましたか。・・・はあ、俺、今度は退院できますかね？」

進藤 「それは私からは何とも言えません」

剛力 「はやく、事務所にもどりたいんですよ。本当に仕事が溜まって、大変なんですよ」

進藤 「あの・・・院長にちゃんと試してみたらどうですか？」

剛力 「え、どういうことです」

進藤 「私が言うのも変ですが・・・剛力さんのその体は剛力さんのものですよ。院長のものじゃないですよ」

剛力 「え？」

進藤 「院長は院長の考えを言ってるだけです」

剛力 「それって、どういう意味ですか」

進藤 「いえ、ああいうところで座って話すとみなさん別人になっちゃうでしょ？ それ、おかしいいつも思うんですよ。そんなセンサーまでつけて、お金も払って、心身さらけだしてるのはみなさんのほうですよ」

剛力 「それは、そうですけど」

進藤 「見せたくないところまで見せて、触られたり」

剛力 「でも、体のことは自分ではわからないですよ」

進藤 「剛力さんらしくないですよ」

剛力 「え」

進藤 「カルテに書いてある内容知ってますか」

剛力 「え」

新藤 「カルテだって書類ですよ」

剛力 「でも、そんな専門的なこと聞いても俺にはわからないですよ」

進藤 「剛力さんらしくないですね。説明を求めることぐらいはしていいでしょ」

剛力 「あ、あの、なんかあったんですか」

進藤 「え？」

剛力 「いや、院長ととか・・・」

進藤 「いえ、別に・・・ただ」

剛力 「ただ？」

進藤 「医者も患者も人間です。」

剛力 「あ、はい」

進藤 「・・・それだけです」

(間)

剛力 「え、それだけって」

進藤 「剛力さんの場合、」

剛力 「はい」

進藤 「・・・」

剛力 「何ですか」

進藤 「ここに居なくともって、思ってますんか」

剛力 「・・・ええ、まあ」

進藤 「そういうことです。それが剛力さんの診断結果じゃないですか。・・・それじゃ、プリント、みなさんにお願ひします」

剛力 「え、あ、はい」

(バスドラ・・・心音)

進藤退室

に会釈)

すれ違いに乗本入室(手にコーラ・進藤

57

乗本 「進藤先生、なんですって?」

剛力 「これこれ、来たよ、院長カウンセリングのスケジュール」
(剛力プリントを乗本に渡し、各ベットに配る)

乗本 「そうですか! 来ましたか。あ、俺は剛力さんの次
か・・え、もうすぐじゃないですか・・ああ、まじですか」

美咲入室

美咲 「こんにちは」

剛力 「あ、(こんにちは)ほんとだ。なんでこうギリギリになっ
てもってくるんだ、毎回。」

美咲 「なんか、あつたんですか?」

乗本 「今日はね、月に一回の院長カウンセリングなんだよ」

美咲 「へー、そういうのあるんですね。」(美波のベットへ)

乗本 「これだね、今後が決まるわけ」

美咲 「今後って?」

乗本 「入院継続か退院かだよ」

美咲 「へー(プリントを見る)、おじいちゃん最後、・・なん
か高校の進学指導みたいですね」

剛力 「あはは、そうだね。いつまでたつても、人間は評価され
るんだね」

乗本 「なんでそういう言い方になるんですか、剛力さんは」

剛力 「本当のことだろ。・・でも、今回は頑張るぞ。俺は」

乗本 「頑張る?どうしたんです?」

剛力 「医者も患者も人間」

乗本 「え?」

剛力 「そういうこと。そういうこと。(出て左に行く)」

乗本 「剛力さん、カウンセリング室は逆でしょ」

剛力 「その前にトイレだよ」

美咲 「剛力さん、学生みたいですわね」

乗本 「あはは、いつまでたっても同じだよね。こういう時って」

美咲 「乗本さんも緊張してるんじゃないですか」

乗本 「おじさんをからかうんじゃないよ」

美咲 「ごめんなさい」

(イライラする乗本)

乗本 「美咲ちゃん、なんか話ない？」

美咲 「え？」

乗本 「なんか」

美咲 「別に・・・」(携帯いじりだす)

乗本 「なんでもいいからさ」

・・・

美咲 「乗本さんのお店ってバイトとかありますか」

乗本 「え？なんで？」

美咲 「偉い人なんですよ、乗本さん」

乗本 「偉い？、うーん、まあ・・・わかんないけど」

美咲 「・・・」

乗本 「美咲ちゃん、車欲しいと思ったことある？」

美咲 「私には無理です」

乗本 「無理って？」

美咲 「だって、お金がかかります。値段高いし、ずっと乗ってる
と駐車場代とか維持費とかで1千万とかすぐ超えちゃうつ
て聞いたことあります。私には無理です。」

乗本 「そう面と言われると辛いなあ。でも、彼氏とか、ね」

美咲 「男とか女とかそういうの関係ないです」

(ハイハット・チツ)

乗本 「ああ」

美咲 「自分はどうなのかって話と思います」

乗本 「じゃ、なんでバイトとかいうの？」

美咲 「・・・いえ、ちよつと聞いてみただけです。乗本さんの話聞いていると働いている人は面白そうですし、毎日、新車みるとどんな感じするんだろうと思って」

乗本 「ひやかし？」

美咲 「いえ、だから、例えばって・・・」

乗本 「え、どういうこと」

美咲 「だから、ごめんなさい。そうですよね。私には関係ない話ですよ」

乗本 「・・・」

美咲 「・・・」

乗本 「美咲ちゃんって好きなこととかやりたいことってあるの？」

美咲 「その質問、つらいです。」

乗本 「え？」

美咲 「わかりません。本当に、わかりません」

乗本 「楽しいと思ったりすることとかはあるでしょ」

美咲 「ありますよ、それは・・・でもわかりません」

乗本 「わかんないことないでしょ」

美咲 （ハイハット・チツ）

乗本 「そういうものなんですか」

美咲 「え？」

乗本 「・・・楽しくないとだめなんですか？」

美咲 「え？」

乗本 「やりたいことしないとだめなんですか？」

乗本 「ま、そりゃ、やりたいことをやったほうが楽しいし・
ねえ」

美咲 「・・・楽しいってなんですか」

乗本 「え」

美咲 「そんな、漠然としてることって」

(ハイハット…チツ)

乗本 「なんか、ごめん」

美咲 「・・・いえ、こちらこそごめんなさい。」

剛力入室

乗本 「え、もう終わったんですか？」

剛力 「・・・退院していいって」

乗本 「え？」

剛力 「やったあ！・・・やりましたよ」

乗本 「おめでとうございます」

剛力 「ありがとうございます」(握手もとめる)

美咲 「・・・よかったですね」

剛力 「ありがとうございますよ。」

乗本 「いつですか？」

剛力 「もういつでもいいって。金曜までなら。」

乗本 「え、いきなりですね」

剛力 「そんなもんなんですかね。・・・言ってみるもんだ。あ、
乗本さん、次ですよ」

乗本 「ああ、はい」

乗本退出

剛力・ベット周りを見て身の回りを片付けだす

出ている書類をケースに入れる

美咲携帯をいじりだす

剛力 「あ、そうだ。美咲ちゃんは今何してんの？」

美咲 「別になんにもしてません」

剛力 「そう？、うちの事務所でバイトしない？」

美咲 「え？」

剛力 「今来てくれる人がやめちゃうんだよ。これから探さないといけないんだけどね」

美咲 「どんなバイトですか？」

剛力 「書類作成、っていうかワープロ、いや、ワードか、使える？」

美咲 「あんまり・・・」

剛力 「どれくらいできるの？」

美咲 「どれくらいっていわれても」

剛力 「資格とか？・・・ほら、ワープロ検定とかあるでしょ」

美咲 「ああ、もってないです」

剛力 「・・・そっか、あれ便利だよね。」

美咲 「そうなんですか」

剛力 「うちみたいな事務系だとね。今の人も一級かなんかを持つてるよ」

美咲 「やつぱり、そういう資格とかないとだめですよね」

剛力 「マストじゃないけどね。職種にもよると思うし。美咲ちゃんは資格とかもってるの？」

美咲 「別にないです」

剛力 「とっておいたほうがいいよ。」

美咲 「続かないんです。そういう勉強が。」

剛力 「ああ、確かに。目的がないとね」

美咲 「そ、そうなんです。どうやったら目的ってみつきります？」

剛力 「それは自分のできることをよく考えるしかないですよ」

美咲 「そうですよね」

剛力 「世の中、できることにみんなお金払ってんだからね」

美咲 「・・・剛力さんは仕事、楽しいですか」

剛力 「うん。仕事自体は楽しくないよ」

美咲 「そうなんですか」

剛力 「楽しいって結果だよ。やったことが感謝されたりしてさ。

その積み重なりじゃないかな」

美咲 「結果？」

剛力 「うん。あとからついてくるもんだよ」

美咲 「・・・あとから」

剛力 「当たり前のことはずっと当たり前なんだよ。ちゃんと踏ん切りつけることはつけていかないとね」

美咲 「・・・」

西田入室

剛力 「あれ、西田さん、ひとり？・・・あけ・・・いや、奥さんは？」

西田 「今、帰りました」

剛力 「え、そうなんだ・・・」

西田、ベットのプリントを見る

剛力 「あ、それ、院長カウンセリングの順番、今、乗本さんが行ってるから、次、西田さんね。・・・おれ、ちょっと、コーラでも買ってくるわ」（明美を追いかける）

剛力退出

西田、ベットによこたわりリラックス状態

美咲 「・・・奥さん、来てたんですか？」

（ハイハット・・チツ）

西田 「・・・」

美咲 「あ、ごめんなさい」

西田 「あ、うん・・・来てたよ」

美咲 「・・・あ、剛力さん退院ですって」

西田 「へー、そうなんだ。それはよかったね。いつ？」

美咲 「いつでもいいんですって」

西田 「そうなんだ」

美咲 「すごく喜んでました」

西田 「そうだろうね。剛力さんは事務所あるしね」

美咲 「なんか、バイト誘われました。」

西田 「バイト？」

美咲 「書類作成の。今の人やめるんですって。で、来ないかって」

西田 「へー」

美咲 「でも、私、ワード苦手で」

西田 「あ、そう、俺も苦手だな。ワープロ」

美咲 「え。そうなんですか？」

西田 「そうだよ。ブラインドで打つとかできないしね」

美咲 「西田さんは・・・」

西田 「何？」

美咲 「いや、なんでもないです。」

西田 「え、何？、言っつてよ」

美咲 「西田さんのできることってなんですか？」

西田 「はあ」

美咲 「ああ、ごめんなさい」

西田 「・・・なんだろうね・・・なんでそんなこと聞くの？」

美咲 「剛力さんが、世の中ではできることに金を払うって言ってたんです。」

西田 「うん」

美咲 「だから、その、西田さん研究してるし、なにができるんだろって」

西田 「あ、そう。でも・・・できる」イコール金じゃないと思うけど

美咲 「え？」

西田 「だって」できる」ってモノじゃないでしょ。本来交換できるとは限らない・・・」

美咲 「どういことですか」

西田 「その金になる」できる」はいつも同じってことじゃないのかな」

美咲 「同じ」

西田 「うん。いつも同じで変わらない切り出せる」できる」

美咲 「あ、資格だ」

西田 「それもそう。でも、世の中の大抵の」できる」はそういうものだけだね。」

美咲 「やっぱ資格かあ」

西田 「うん。誰でもいいってことだよ。だから・・・」

美咲 「誰でもいい？」

西田 「そう・・・誰でもできること・・・」

美咲 「西田さんは仕事、楽しいですか」

西田 「・・・」

美咲 「あ、ごめんなさい」

美咲 「・・・」

乗本入室

美咲 「あ」

乗本 「あ、西田さん、次です。どうぞ。」

西田 「はい・・・どうでした？」

乗本 「・・・駄目でした。入院継続です。・・・食事制限までされ
ちゃいました」

西田 「ああ、そうですね・・・」

乗本 「間食なんか我慢すればよかった」

西田 「・・・」

乗本 「剛力さんはいいなあ」

西田 「ああ、聞きましたよ」

乗本 「なんか、嬉しそうに女性とロビーで話してましたよ」

西田 「・・・」

乗本 「誰ですかね」

西田 「・・・じゃ、行ってきます」

西田退出

電話が鳴る

乗本 「ああ・・・くそ、もう(電話にでる)・・・もしもし、
岸田病院、109病棟です。・・・え、・・・あ、はい、私で
す・・・あ、はい、ご無沙汰しております。・・・ええ・・・は
い・・・はい、このたびはご迷惑をおかけして・・・今カウ
ンセリングが終わったとこなんです・・・ええ・・・ああ、
もう少しかかるようなんですが・・・はい、すみませ
ん・・・はい・・・え・・・太田

が?・・・それは・・・はい、・・・
異動って、・・・いや、そんな、たいしたことでは、・・・で
も、・・・わかりました。・・・はい、あ
りがとうございます。・・・」

電話切る

乗本 「くそ!、最悪」(ベットに倒れこむ)

美咲退出

剛力入室(センサーつけていない。タブレット
等をカバンにしまう)

剛力 「あ、いたんだ。びっくりするじゃん。．．あ、どうでした？ カウンセリング」

乗本 「．．．継続ですよ」

剛力 「．．．ああ、そう．．．．まあ、．．．ね」

乗本 「最悪です」

剛力 「そんな、まあ、気を落とさない」

乗本 「．．．センサー、外したんですね」

剛力 「え、あ、うん」

乗本 「（自分のセンサーを見て）くそ、こんなものしてる間に．．．」

剛力 「え？」

乗本 「外されましたよ」

剛力 「え？」

乗本 「会社ですよ。さっき電話あって、じっくり体を直せって．．．一時的に総務部配属はどうだって．．．」

剛力 「え〜」

乗本 「終わりましたよ。」

剛力 「でも、それって、その、一時的な異動でしょ．．．だって、乗本さん、会社の命令でここに来たんでしょう」

乗本 「それとこれとは別ですよ」

剛力 「そんな．．．」

乗本 「なんですか、このセンサー、この病院。．．最低ですよ」

剛力 「．．．コーラでも買ってこようか？」

乗本 （ハイハット・・チツ）

剛力 「ええ、コーラって」

乗本 「どうしたの？」

剛力 「いや、もう、いいですよ！ ほっといてください」（布団に入る）

剛力退出

西田入室・人形（顔なし顔）をベットに寝かし、
自分は椅子に以下かつこ〇はドラムの音で表現

西田 「元気してる？・・・もう30年ぐらいたつよなあ」

人形 「（あつというまです。研さん元気ですか？）」

西田 「うん、俺は元気だよ。ちよつと神経症らしいけど」

人形 「（ストレスですか？）」

西田 「たいしたことないよ。病名は特定できないみたいだけ
だ。」

人形 「（いや、怖いよ本当ですよ気づかないって）」

西田 「うん、だからこんなところにいるんだらうね」

人形 「（じゃ、気づかないとですね）」

西田 「気づくって、わかんないよ」

・・・

西田 「やつぱり、別れたほうがいいよね」

乗本布団から覗き見

人形 「（何が・・・え、何が、また急に研さん）」

西田 「そんなに驚くことないだろうが、あつちから、みてたん
とちやうの？・・・でも川ちゃんのそういうところ好きだった
よ」

人形 「（何、気持ち悪いですよ）」

西田 「なんか、めつちやつるつるの滑り台みたいなの」

人形 「（ほめてるんですか、それ？）」

西田 「そんな感じやったって。言っただけでなかったけど。こつちも
こけてるのが楽しくなるつちゆうか」

人形 「（お茶漬けちやちやでいきましようよ）」

西田 「あはは、それ中学の時だろ。お茶漬けちやちやちやって」

進藤入室・入り口で立聞き（手に西田の顔写真）

人形 「（大抵のことはお茶漬けにかなわないですよね）」

西田 「弁当箱の蓋でね。川ちゃんほんまうまそうに食ってたわ」

人形 「（人生、さらさらっといきましょてね）」

西田 「人生、さらさらしすぎだろ。川ちゃん」

人形 「（・・・無音）」

人形 「（別れるって奥さんですか）」

西田 「うん。俺がおかしいと思ってることは相手もそう思ってるんやろなって」

人形 「（そんなもんですかね）」

西田 「少なくとも感じてはいるよ・・・ずっとそう思ってるし」

人形 「（へへそんなもんですか）」

西田 「川ちゃんは結婚してすぐ死んじゃったやろ。」

人形 「（・・・無音）」

西田 「ごめん。・・・あのさ・・・飛行機の窓から下を見てるとさ、下界の家がすごく小さく見えて、作り物みたいに見えるだろ」

人形 「（え）」

西田 「なんか、街を歩いてても、最近、そんな風に見えてきて・・・」

人形 「（つくりものって?）」

西田 「うん。住んでる家や会社もなんか巨大に見えたり、すごく薄くみえたり、硬く見えたり。なんていううのか、初めて来た海外の町みたいに見えてくるのよ。」

人形 「（研さん、それ、あぶないんじゃないですか）」

西田 「やっぱりあぶないよね、俺。ずっとそれが抜けないんだよ。」

人形 「（そうなんですか?）」

西田 「・・・あいつに対しても・・・なんか、申し訳ないけど・・・なんていうかビー玉に見えてくんのよ。・・・どうしようもないのよ」

人形 「(・・・無音)」

西田 「川ちゃん。そっちからはどうみえる」

人形 「(・・・無音)」

西田 「俺だって、ビー玉みたいなもんだろ」

人形 「(・・・無音)」

西田 「俺、今度生まれ変わるなら、山とか川になりたいよ」

人形 「(・・・無音)」

剛力入場(コーラ二つもってる)

剛力 「どうしたんですか？」(進藤に)

進藤 「え、いや」

剛力 「なんですか、その写真？」

進藤 「え・・・いや(西田の方へ)西田さん、やっぱり、その人形、院長に返そう」

西田 「いや、別にいいですけど」

進藤 「でも、なんか、おかしいよ」

西田 「おかしいって、これも治療法の一つなんですよね。」

進藤 「・・・」

西田 「違うんですか？」

進藤 「・・・たぶん、私はこっちの分野は専門外だからよくわからないけど・・・なんか、その、心配なの」

西田 「やってみますよ。僕」

剛力 「乗本さん、コーラ、はい」

乗本、コーラをぐっと飲む

乗本 「西田さん、あの、すみません。・・・立聞きする気は本当になかったんですよ。」

西田 「ああ、かまいませんよ。みなさんにはどうせ知られるわけですし」

乗本 「本当にすみません。でも、半分寝てたんで、その・・・」

西田 「全然、いいですよ。先生、写真、ください。」

進藤 「ええ、でも」

西田 「いいですから」

進藤、西田の顔写真を渡す。西田、人形の顔に貼る。

(ハイハット…チツ)

乗本 「え、なんです。」

西田 「人形治療だそうです」

剛力 「人形治療・・・って、え、なに(進藤に)」

進藤 「わからないわよ。私にも」

乗本 「わからないってなんですか」

西田 「院長が言うには、自分自身が受けてる感覚を一旦、保留すること、」

剛力 「自分自身を一旦保留する？」

進藤 「あ、いえ。剛力さん、今のは忘れてください。専門外の私にはなんとも言えないの。ほんとうごめんなさい、みなさんも、忘れてください」

西田 「不思議な感覚はしてきますよ。」

乗本 「いや、気持ち悪くないですか？」

西田 「うゝん、わからない」

乗本 「わからないって？」

西田 「写真の自分って、どっかよそよそしいですよね」

乗本 「え？」

西田 「僕のように僕ではない」

乗本 「ええ？」

西田 「ほら、アルバムとか見てると、この時の自分どっかうそつぽいって思ったことないですか」

剛力 「確かに、みんなに見て欲しくないって感じる時あるな」「そうですか？」

西田 「こいつ、どこかで僕のことをうそつぽいって見てるんでしょうね」

乗本 「え、ちよつと、何言ってるんですか」

西田 「どっちもうそつぽい。いいかもしれませぬ」

乗本 「先生、西田さん、大丈夫ですか」

進藤 「西田さん、気持ちが悪くなったらいつでも拒否できますからね。正しい療法なんてないんですからね」

西田 「乗本さん、すみません。変なことになってしまつて」

乗本 「いえ」

進藤 「乗本さんも何かあつたらすぐ言つてくださいね」

乗本 「何かあつたら？」

進藤 「ええ、西田さん、乗本さんにご迷惑はかけたくないつて（ハイハット…チツ）

乗本 「いえ、そんな」

剛力 「言いたいことは言つたほうがいいよ」

乗本 「……」

剛力 「どうしたの？」

乗本 「なんかもう、ひとりになりたいです、僕」

暗転

4.

二日目夜

美波…鼻歌（モーニン）

西田…人形を座らせ自分は寝ている（瞑想）

乗本…眠れそうになく寝返りを繰り返す

剛力…嬉しそうに携帯でメールを打っている

美波以外スポットが当たっている

美波の鼻歌が徐々に小さくなる。

西田 「乗本さん・・・」

乗本 「・・・」

西田 「寝ましたか」

乗本 「・・・起きてますよ」

西田 「すみません。ご迷惑かけて」

乗本 「・・・いいえ、別に」

西田 「そうですか・・・ありがとうございます」

乗本 「別に、お礼なんかいいですよ」

西田 「ローラいいですね」

乗本 「え？」

西田 「車って」

乗本 「何がですか？」

西田 「乗って、知らないところに行って、降りる」

乗本 「え？」

西田 「乗せられて、知らないところで降ろされる」

乗本 「・・・今日は、勘弁してください」

西田 「すみません」

剛力だけスポットが最後のこり暗転

空室…人形がベットの上で座っている

剛力のベットは片付けられている

乗本入室、人形に近づく

「あんた、ここ気に入ってるんでしょ。だんだん馴染んちやってね。・・・僕はね、正直、いやですよ。ここ。・・・でも、帰れないんですよ。まったく。・・・どこへ行っただんですか西田さんは・・・いますって・・・はいはい、聞いた私が馬鹿でした。」

明美入室

「あの、すみません。失礼します」（西田のベットへ）

「あ、はい」

（ハイハット…チツ）

「ええ、何ですか？これ」

「・・・」

「あの、西田は・・・西田は今、どこにるんですか」

「え、いや、すぐ戻ってくると思いますけど」

「西田、大丈夫なんでしょうか」

「どなた、ですか」

「あ、私、西田の妻です」

「ああ、そうですね・・・あ、私、同室の乗本といいます」

「いつも主人がお世話になってます」

「いえ、いえ、こちらこそ・・・ああ、びっくりしますよね、これ。」

「ええ、主人は大丈夫なんですか」

「私に聞かれても・・・なんか人形療法らしいです」

「人形療法・・・気持ち悪い」

「・・・」

「気持ち悪いですよね」

「・・・まあ、最初はびっくりしましたがけどね」

明美 「こんなことしないといけないんですか」

乗本 「私にはなんとも・・・」

明美 「すみません、こんな。こんな、人形なんて、ご迷惑でしょ、きつと」(人形に近づいて観察)

乗本 「いえ」

明美 「この人形使って何してるんですか」

乗本 「いや、別に・・・」

明美 「自分の写真まで貼って」

乗本 「まあ、写真ってだけで」

明美 「・・・話しかけたりしてるんですか」

乗本 「・・・」

明美 「してるんですか」

乗本 「いや、まあ・・・」

明美 「気持ちわるいですよね。やっぱり、個室に移ったほうがいいですよね」

乗本 「いや、僕は気にしてませんよ。」

明美 「いや、ご迷惑でしょ」

乗本 「別に、慣れたというか」

明美 「でも、西田の場合、みなさんとは違うみたいですし」

乗本 「違うって？」

明美 「いえ、病気が。周りの方のことを考えると」

乗本 (ハイハット…チツ)

明美 「周り？、だから・・・平気ですよ、僕は」

乗本 「え、そうですか？でも、個室のほうが治療に専念できるんじゃないですかね」

明美 「あの、それなら院長がそうしてるはずですよ」

乗本 「そうですね、院長先生に相談してみます」

乗本 「あの、すみませんが、どうしてあなたが西田さんの居場所をどうこう・・・その、言えるんですか」

明美 「え？」

乗本 「何も起こってないですよ」

明美 「いえ、ただ、相談したほうがいいんじゃないかと」

乗本 「ですから、なぜなんですか」

明美 「だって、不安ですから」

(ハイハット…チツ)

乗本 「・・・不安って？」

明美 「ええ」

乗本 「こっちだって、不安ですよ。それは、お互い様じゃないですか！」

明美 「え、何を言ってるんです？」

西田入室

西田に気づき会釈して乗本退出

西田 「どうしたの」

明美 「わからない」

西田 「え、乗本さんと何か話したの」

明美 「あなたが迷惑かけてないか尋ねてただけなのに」

西田 「あ、そう。それでなんて」

明美 「いえ、気にしてないって」

西田 「ああ、そう」

明美 「この人形、あなた、大丈夫なの？」

西田 「ああ、これ、治療の一環だよ」

明美 「それはお隣さんにも聞いたけど。なんか、よくなってるのあなた」

西田 「さあ、そういうことって今わかることじゃないだろ」

明美 「え？」

美波入室

美波 「あ、これはすいません。すぐでていきますから」

西田 「いや、そんな、気にしなくていいですよ」

(ハイハット…チツ)

美波 「え、もしか、奥さんけ？」

西田 「ええ、そうです」

明美 「いつも主人がお世話になってます」

美波 「ほう、そうけそうけ。はじめまして。美波です。ご主人にはいろんな話聞かせてもらってます。」

明美 「あ、そうですか、いろんな話、ですか」

美波 「西田さんは複雑でしょ。刺激になるんですよ。私なんかの年にはね。言ってることが時々わかんねけどよ。」

明美 「ご迷惑をおかけしてすみません」

美波 「え、いえいえ。いやあ、西田さん、こんなべっぴんの奥さんがいて幸せもんだね。全く。」

明美 「いえいえ、そんな」

美波 「あ、すみません。俺のことは気にしないでください」

明美 「あの、本当に、その、ご迷惑をおかけしてませんか」

美波 「全然」

明美 「こんな人形とがありますし」

美波 「あ、それけ、不思議なもんでね、なれちまいましたよ」

明美 「え」

美波 「こういうところにいるとね、なんでも興味をもっちゃまうんですよ」

明美 「興味？」

美波 「ええ、どんなものでも、なんか、消化しちゃうんですよ。あのローラだつてね。」

明美 「ローラ？」

西田 「あはは、乗本さんの車」

明美 「車？・ちよつと、言ってることが」

美波 「すみません。むずかしいことはわかね〜けど、いろいろ
でてくるわけですよ。ね、西田さん」

明美 「はあ」

西田 「まあ、なんとかやってるよ。みなさんのおかげで」

明美 「ああ、そう・・そうならいいけど」

西田 「ところで、何かあったの」

明美 「え？」

西田 「用があるからきたんだろ」

明美 「あ、用ってわけでもないけど」

西田 「何」

明美 「あの、家にいても、なんかストレスたまるし」

西田 「うん」

明美 「パートに出ようかなと思って」

西田 「へ〜、何するの」

明美 「え、事務職だけどね」

西田 「ああ、いいんじゃない」

明美 「そう？・・ほらそこにいた剛力さんの事務所でちよつと
探してて」

西田 （ハイハット・チツ）

明美 「え、剛力さんのとこ・・」

明美 「だめかな」

西田 「・・いや、別に、僕がどうこう言ううことじゃないし」

明美 「そう」

西田 「いつから行ってるの？」

明美 「え、・・・だ、だから、これから」
西田 「あ、そう。いつから行くの？」
明美 「・・・来週の頭からかな」
西田 「そう、場所は？」
明美 「え？」
西田 「最寄の駅とかは？」
明美 「・・・五反田・・・かな・・・」
西田 「駅の近く？」
明美 「え、うん、えっと・・・そうそう、10分ぐらいかな・・・」
西田 「そう・・・電話でもよかったのに」
明美 「え？」
西田 「わざわざ来なくても」
明美 「あ、ちよつとついでもあつたし」
西田 「ふん」
明美 「・・・」
明美 「そんなことより、本当に大丈夫なの」
西田 「何が」
明美 「私の方から院長に言ってもいいよ」
西田 「何を？、いいよ、別に」
明美 「あ、そう。じゃ、いくね」
西田 「うん」
明美退出
西田、瞑想を始めようとする
美波 「いいのけ？」
西田 「・・・何がです」
美波 「聞いてしまったけどよ。剛力さんのところだべ」

西田 「いいんじゃないですか」

美波 「・・・そっけ」

西田 「嬉しそうだったでしょ」

美波 「だからよ、それでいいのけ」

西田 「ええ」 (西田ベットへ)

・・・

乗本入室

乗本 「剛力さん、いません？」

美波 「え、きてるんけ」

乗本 「いや、駐車場に剛力さんのベンツがあつたから」

美波 「あ、西田さんよ、」

乗本 「あれ、奥さんは？」

美波 「さっき、けーったよ」

西田 「・・・」 (瞑想)

乗本 「え」

(音) 乗本退室 (車を見に)

美波 「西田さん、本当にいいのけ」

西田 (人形の写真を破る) 「いいんですよ」 (瞑想はじめる)

美波 「・・・西田さんの考えてることはわかんねえや」

西田 「ありがとうございます。美波さん」

美波 「え？」

乗本入室

乗本 「ベンツなかったですよ、あの、奥さんって・・・」

西田 「車っていいですよ。違う場所に連れてってくれる」

乗本 「はあ」

西田 「すごい力で人間を遠くに運んでくれる」

乗本 「何いつてるんですか、西田さん」

西田 「ご迷惑おかけしてすみません」

乗本 「・・・あ、写真・・・」

西田 「ああ、なくていいです。人形は誰でもないし、誰にでもなれるほうがいいですよね」(西田、瞑想)

暗転・西田だけにスポット

西田 (人形に向かって) 「川ちゃん、これでいいんだよ
ね。・・・うん、すつきりしてる。・・・それ、俺もお茶漬け
たべたくなってきたよ。・・・川ちゃんちのお新香は最高だ
よね。・・・口の奥にしみこむっていうか、お茶がすごくほ
しくなる。・・・こりこり噛むほどにどんどんおいしくな
る。・・・そうそう、さらさらがとまらないね」「まにあわ
ないことないよね。・・・こりこりすればまたさらさら
と・・・(音背景)」

明転

バックに美波の練習のサックスがかすかに聞こ
える

乗本・・・ローラを手にとってみている

西田 (瞑想から覚める) 「乗本さん」

乗本 「・・・」

西田 「乗本さん」

乗本 「え、あ、はい」

西田 「乗本さんのローラ、いつか載せてくれませんか」

乗本 「え」

西田 「乗本さんの相棒でしょ」

乗本 「相棒って」

西田 「ずっと乗ってきたんですよ」

乗本 「ええ」

西田 「乗本さんのことよく知ってるんですよ、きっと」

乗本 「僕のこと？」

西田 「ええ、お互いのこと知らないで動かないでしょ。車って」

乗本 「ああ、確かに。車にも意識ってあるんですかね」

西田 「さあ」

乗本 「さあ、って」

西田 「でも、どっかにそのようなものが生まれるんですかね」

乗本 「そのようなもの？」

西田 「ええ、乗本さんの運転のくせで、どっかが歪んで、それをなんとかしよって変わっていくところはありますよね」

乗本 「わかったような、わからないような」

西田 「だから、人間は乗り物が好きなんですかね」

乗本 「そうですね、一体感がたまらないですね」

西田 「うーん、確かに。でも、その先じゃないですかね。」

乗本 「え、その先？」

西田 「僕はもっと恐ろしい「力」みたいなものを感じます」

乗本 「力？」

西田 「夜中、歩いていて、電車とか、車とかすれちがうと、その音とかヘッドライトが強烈で驚くんです。こいつら生きてるんじゃないかって（音）」

乗本 「生きてる？」

西田 「ええ、人間ではどうしようもない並外れた力もってますよね。やつら。」

乗本 「力？」

西田 「轢かれたら死ぬし、轢き殺すこともできる」

（ハイハット・チツ）

乗本 「なんか、怖いな西田さん」

西田 「だから、一体感って、そういう力に操られて、でも力の
ようなものももらう」

乗本 「モビルスーツ」

西田 「そうそう、乗り物って人間の心を発火させるんですよ」

乗本 「発火、確かに」

西田 「美波さんのサックスだってそうですよ」

乗本 「サックス？」

西田 「モノは選ぶだけでは意味がない」

乗本 「え？」

西田 「使うだけでも意味がない」

乗本 「西田さん」

・・・

西田 「・・・こいつ（人形をとる）で発火しますかね」

乗本 「大丈夫ですか」

西田 （人形を見つめる）

美咲入室（あわてて入ってくる）

美咲 「おじいちゃんが、」

乗本 「え。どうしたの」

美咲 「倒れたの、お願い、来てください」

全員退室

暗転

音楽（断絶）

明転

美波のベットは片付いている

乗本のベットサイドに人形

乗本ベットで瞑想

進藤入室

(ハイハット…チツ)

「え、何」

「・・・」

「乗本さん、」

(目を覚ます)

「・・・それ、西田さんのじゃ」

「ええ、そうですよ」 (人形を西田のベットわきに戻す。
人形に手であいさつ)

「・・・乗本さん、あれ、使ってるの？」

「使うっていうか、まあ、置いてるっていうか」

「へー、そうなんだ」

「そんなに感心しなくても」

「・・・で、誰と話すの」

「誰って」

「話すんですよ」

「いや、そういうレベルじゃないっていうか」

「え、どういうこと」

「ただ、馴染んでるっていうか」

「馴染む」

「ええ、誰にでもなって、誰でもない」

「ええ？」

進藤

乗本

進藤

乗本 「ただ、いるってどうか？」

進藤 「大丈夫？」

乗本 「大丈夫ですよ」

進藤 「ああ、そう」

乗本 「先生の部屋には人形とか、ありますか？」

進藤 「え、ないよ」

乗本 「そうですか、じゃ、わからないかも」

進藤 「・・・」

乗本 (人形を取って) 「持って帰ってみます。すこしぐらいならいいですよ」

(ハイハット…チツ)

進藤 「ええ」

乗本 「西田さんだってOKですよ」

進藤 「いいよ」

乗本 「え、そんな、いいですよ」

進藤 「私は大丈夫だから」

乗本 「大丈夫とかじゃなくてですね。何も喋りませんから」

進藤 「はあ」

乗本 「話しかけない限り。・・・ただ、見られているのもいいもんですよ」

進藤 「あのさ、目ないよ、この人形。・・・西田さんの影響？、大丈夫」

乗本 「だから、こいつもここにいてるってだけですよ」

進藤 「・・・そうなんだ」

西田入室

乗本 「あ、どうですか、美波さん」

西田 「うん。」

乗本 「そうですか」

進藤 「まあ、見守るしかね」

乗本 「……」

乗本 「意識もどりますかね」

進藤 「なんとも、言えないね」

乗本 「そうですよね」

西田 「ずっと、安らかな顔なんですよね」

乗本 「うん。そうなんですよね」

進藤 「ずっとサックス吹いてるのかもね」

乗本 「え」

西田 「そうかも……たまたまに指が微妙に動く時があります」

乗本 「それならいい、……いや、いいのかな」

進藤 「……」

乗本 「あの、さ」

進藤 「え」

乗本 「私、さ」

進藤 「……」

西田 「何です」

進藤 「明日でき、この病院やめることにしたの」

(ハイハット…チツ)

乗本 「え、何、え、そんな、急に」

西田 「……そうなんですか」

乗本 「院長、ですか？」

進藤 「え」

乗本 「……やっぱり」

進藤 「まあ、……でもあの院長だからっていうのも違うかな」

西田 「どうということですよ」

進藤 「いつかくるものが来たって感じかな」

乗本 「もう、なんか、寂しいなあ」

進藤 「ありがとうね」

乗本 「・・・いえ」

西田 「予感、してたんですか」

進藤 「そう。たぶん。」

乗本 「別の病院に行くんですか」

進藤 「わからない」

乗本 「わからないって」

進藤 「今、そういうことでもないかなって」

西田 「病院から離れるんですか？」

進藤 「うん。そういうことになるかも」

西田 「いいですね」

進藤 「いい？」

西田 「決められたんですね」

進藤 「西田さん、予感は錆びるよ」

西田 「え」

進藤 「時間がたてばたつほどね」

西田 「・・・」

進藤 「全部、受け身になってくる」

西田 「・・・」

進藤 「自分の体も頭も錆びてくるよ」

西田 「・・・」

進藤 「待つてみることも大切だけどね」

乗本 「なんか、僕、いつ出れるんだろ」

進藤 「乗本さんはもう出てるよ」

乗本 「え」

進藤 「もう、予感してるよ」

乗本 「え」

進藤 「出たいんでしょ」

乗本 「そりゃ」

進藤 「じゃ、外せばいいでしょ、そのセンサー」

乗本 「そんな」

進藤 「予感を邪魔する心配をしてるだけだよ」

乗本 「心配・・そうかもしれないけど」

進藤 「世の中のことも、自分のことも、体のこともわからないのよ」(西田に)

乗本 「どうすればいいかわからないですよ、僕は」

進藤 「でも、みんな動いてる。地球も海も地面も生き物も細胞も分子も、みんなじつとなんかしてない。生まれては消える。」(西田に)

乗本 「わかってますよ、そんなことは」

進藤 「そうかな」

乗本 「ええ、だから迷ってるんでしょ」

進藤 「なら、わかってないでしょ」

乗本 「え」

進藤 「きつと、まだまだ脳みそは世界の変化に追いついてない。特にこのヘルメットの部分は特にね」(西田に)

乗本 「全然、わかりません」

進藤 「そう。わかんないのはあたりまえ。だから、頭に頼っちゃだめよ」

間

進藤 「ごめんなさい。勝手に喋って。乗本さん、これあげるよ。
(聴診器を渡す)」

乗本 「え、はい、でもどうして」

進藤 「乗本さん、耳いいしね」

乗本 「でも心臓の音聞いたって・・・」

進藤 「わかんないけど。この聴診器は今、私より乗本さんに近い気がするの」

乗本 「・・・ありがとうございます」

西田 「・・・」

進藤 「じゃあね、先に行くね。またね。」

間

(ハイハット…チツ)

乗本 「何が、もう。先に行くって・・・。こんなもの、もらっても、近いつて何が・・・」

西田 「・・・」(人形を見てる)

乗本 「・・・」

西田 「あいつは動きませんね」

乗本 「・・・」

西田 「あいつは、僕の脳みそみたいなものかも」

間

美咲入室・進藤とすれ違い(サックスを持って
いる)

美咲 「こんにちは」

乗本 「どうしたの」

美咲 「・・・これ、ここに置かせてもらってもいいですか」

西田 「え・・・どうして」

美咲 「すみません。あの、父が、見たくないっていうので」

西田 「どういうこと」

美咲 「練習中に倒れたでしょ、おじいちゃん。だから・・・」

西田 「ああ、そう、でも、ここに置いてても」

美咲 「すみません。・・・でも、意識戻ったら、ないとかわいそ
うと思ひまして」

西田 「そっか、いいよ」

美咲 「ありがとうございます。・・・でも、どこに」

西田 「僕のベット脇でもいいよ」

美咲 「はい」

西田 「美咲ちゃんは元気？」

美咲 「ええ、わりと」

西田 「そう。・・・えらいね美咲ちゃんは」

美咲 「そんなことないです」

西田 「そう。美波さん、意識もどるといいね」

美咲 「はい、進藤先生が心臓はすごく頑張ってるって」

西田 「え」

美咲 「・・・泣いてました」

西田 「進藤先生が？」

美咲 「はい、聞こえてるでしょって、おじいちゃんに言っ
てました」

・・・

美咲 「じゃ、戻ります。私」

西田 「うん・・・」

美咲 「あ、西田さん、最近、ジェリー・マリガン聴いています」

西田 「そうなんだ。」

美咲 「では、失礼します。」

暗転

乗本・西田にスポットライト

人形は二人の間

乗本、聴診器をつけ、瞑想

心音（乗本）ピ（ハイハット）・ドックン（バスドラ）
しばらく演奏・・・ピ音が時々無くなつては生まれる（ピ音
だけになつたりする）徐々にフェードアウト

・・・

乗本、うれしそうにハンドルを握つたり、ダッシュユボード
をさわつたりする（エア―演技）車のエンジンをかける
（ドラム・イントロ）

乗本

「じゃ、西田さん、お世話になりました。」・・・

心音（乗本）ピ（ハイハット）・ドックン（バスドラ）し
ばらく演奏・・・徐々にフェードアウト

乗本のスポットライト消える。

・・・

「川ちゃん？・・・」

人形

「・・・」

西田

「いないか・・・」

・・・

西田

「心筋細胞の拍動」

・・・

西田

「チツ・・・チツ・・・チツ・・・チツ」

西田

「チツ・・・ドン（バスドラ）・・・チツ・・・ド
ン（バスドラ）」

西田

「チツ・・・ドン（バスドラ）・・・チツ・・・ドン（バスド
ラ）」

西田

「チッ、ドン（バスドラ）・チッ、ドン（バスドラ）・チ
ツドン（バスドラ）」

・・・

西田

「予感は錆びる・・・」

「チッ・ドン（バスドラ）・チッ・ドン（バスド
ラ）」

チッ（ハイハット）・ドン（バスドラ）チッ（ハイハッ
ト）・・・ドン（バスドラ）・・・チッ（ハイハッ
ト）・・・ドン（バスドラ）・チッ（ハイハット）・・・ド
ン（バスドラ）」

西田、美波のサクスクエースをあける

「・・・（バスドラ）・・・（バスドラ）・・・
（バスドラ）・・・（バスドラ）・・・（バスドラ）・・・
（バスドラ）・・・（バスドラ）・・・（バスドラ）・・・（バスド
ラ）」

後半、西田、美波のサククスを吹き上げる音が重なる（メ
ロデーというより叫びのような反復音）。

ドラムとの即興

暗転

∞

朝

誰もいない病室（人形、中央床にうつ伏せに倒れている）

電話がなる・・・

おわり